

人形浄瑠璃

春の文楽座

四月興行



しぼつ四

文楽座

陽春四月

春いよ／＼ 酣に御座ぬます。皆様御健康の益々御熾んなことを何よりも御欣び申上ます。さて、春の文樂座は人形淨瑠璃の極彩に豊醇な高雅な香りを充滿させて只一氣に皆様を蕩酔させんと臻す陣容で御座ぬます。

恰も大聖日蓮上人六百五十年遠忌に御座ぬますれば大日蓮記念興行と仕り華絢なる花の春を飾らんとする次第で御座ぬます。

皆様何卒お誘ひ合され御はこびのほどお願ひ申上げます。

昭和六年四月

四ツ橋

文樂座

昭和六年四月一日初日

初日 午後二時開幕
二日目より 午後三時開幕

二日目よりの

御覽料

- 一等椅子席 御一名 金三圓
- 二等席 御一名 金一圓五十錢
- 三等席 御一名 金八十錢
- 一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
専用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌カトツ廣告掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪西區土佐堀通一丁目
長三〇八番
四九四番
四九四番

(44) 堀土



文樂座四月興行人形淨瑠璃

六百五十年遠忌

大日蓮記念興行

前 日蓮聖人御法海

法輪石の段より
本門寺の段まで

法輪石の段 (三時より三時二十分まで)
土牢の段 (三時廿五分より四時十分まで)

御休憩時間 十五分間

北條館の段 鶴ヶ岡八幡宮の段
聖人御難の段 北條館天變の段
行合川の段 龍の口の段
(四時廿五分より五時四十分まで)

御食事時間 二十分間

食満南北氏新作竹本津太夫 鶴器友次郎 作曲
塚原三味堂の段 (六時より七時まで)
御食事時間 二十分間

勘助住家の段 (七時二十分より八時五十分まで)
本門寺の段

御休憩時間 十五分間

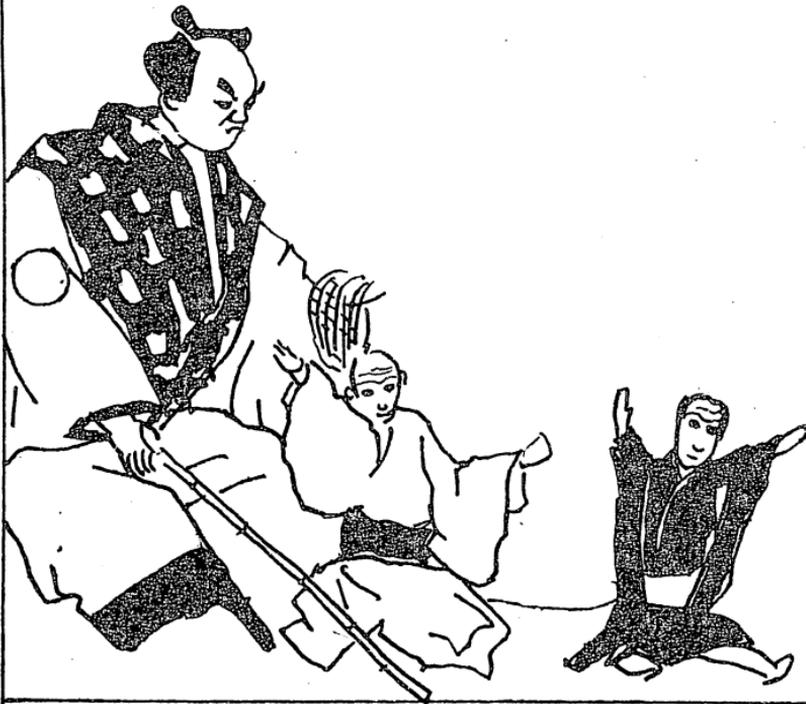
中 近頃河原の達引

堀川猿廻しの段 (九時十分より十時二十分まで)

御休憩時間 十分間

切 鬼一法眼三畧卷

五條橋の段 (十時三十分より十時五十分まで)





人形芝居について

◆ 人形芝居發達のこと

◆ 文樂座なり立のこと

◆ 人形頭説明のこと

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたご御座います。其當時に、四三三云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、さ云ふ想像は出来ない事もありませぬ。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いて居たらしく御座います。淨土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものらしく、所謂首掛芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの嚆矢する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線の上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形此三者が綜合される事に成りました

たのも、慶長年中、即ち徳川の始
頃ですむ、忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋
町さか、櫛も立つて此人形芝居も繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのですむ、然し舞臺などは固よ
り無く其人形さて首もあるばかり、
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛騨掾も始めて其手足の工夫も
したものですさか。由來此掾號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形も出來たり、野呂松のの

るま、人形も出來たり、次郎三郎が
おやま、人形を使つたり、殊には彼
の元祿時代になるご大阪へ義太夫が
現れて竹本座をばじめ、又近松翁
が現れて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切なる名淨瑠璃を澤山書
き卸し、しかも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛さ云ふ名人も出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたさ云ふのが、始めは此人形を
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之も見好くないから黒幕の陰に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛も袴を着けて手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る
事がないといふ評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した
のですから、従つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美々しく立派やかな盡
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ゆきにするやら、
太夫も出語りをするやら、例へば人
形にしてから先づ眼も動き、指先
も動き、享保の末には竹本座『大内
鑑』の典勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になるご豊竹座『武烈天皇

儀」の佐手彦の肩を動かさしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の晴業を示して以來、さいふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『夏祭』の人形に始めて帷子衣裳を着せるほか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黒縹子の前帯淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時代さいふものは操盛人を極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立

して其眞實は寧まじい有様であつた云ひます。江戸まで矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞しと此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのです。享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てからと云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になる。漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつた。見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他大夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れりと云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大坂高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以来發展を來たしてゐました。大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四少橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうか。考へます。次第で御座います。序でなむら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事。出來、しかも其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々々定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座

の「用明天皇職人鑑」の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば「寺子屋」の源藏、「妻八」の入郎兵衛、或は「千本櫻」の銀平、「陣屋」の盛綱のこきき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴さあります。今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事がある云ひます。兎もあれ昔相巫や「薄雪」の兵衛、あるひは「紙治」の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた「日本振

袖始」から出た人形だぞ申します。それから若男といふのは源太も呼んでゐる。か聞きますが持役として「朝顔日記」の駒澤に「太十」の重次郎、その眼隅へ張を入れ其肩を引きつめる。こ「阿古屋」の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをする云ひます。又所謂おやまの中にはおむす云つて之は勿論娘の事で「野崎」のお染「壺坂」のお里「妹背山」のお三輪などを勤めるものあります。南水漫遊に傾城さあるのも多分これと同じものか。考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



法論石の段

前 日蓮上人御法海

法論石の段より
本門寺の段まで

を得た日蓮記中の最も主要な場面でありませう。

(床本) 法論石の段

日蓮聖人

(豊竹和泉大夫 豊竹島大夫)

善智坊

(竹本長尾大夫 竹本鏡太夫)

鶴澤叶

人形

日蓮聖人 吉田榮三

弟子僧 大ぜい

弟子僧 大ぜい

善智坊 吉田玉松

山伏 大ぜい

山伏 大ぜい

この淨瑠璃は近松門左衛門作の『日蓮記見視』増補改題したもので並木鯨兒、並木正三の作、淺田一鳥、並木宗輔が添削してゐます。大聖日蓮聖人が法華經弘通のためにあらゆる辛苦艱難に遭遇したるが其鐵石心は益々堅く種々の奇瑞を胎して本門寺に遷化さるゝまでの御事蹟をものたまるもので、殊に今度上演される佐渡ヶ島塚原三味堂の段はかつて御一代記淨瑠璃に見なかつたものを食満南北氏の新作、竹本津太夫、鶴澤友次郎兩師の作曲によつて初めて上場

末世億劫衆生の爲轉輪王の位を捨て難行苦行なし賜ひし釋迦牟尼佛の古へを御身の上に行ひ賜ふ高祖日蓮大聖人大乘弘通の旅の空そよ／＼風さへ日さかりは御名を思ひ片影へまはり坂なる薦かづら嵐にさげ峯の松谷の戸出し鶯のホウ法花けふや翌はなを浮世はよしやあし曳の山路にかゝり暫らくば木の根に休らひおはらまし聖人四方を見やり賜ひアゝ哀樂轉變の世の中さば佛も是を説き賜ふ我釋門の教法を學び三衣を身にまひ經綸書籍に眼をさらし 自法華經を立諸國弘通勸進すさいへ共末正

法をしる者稀し去にても御父母君の御膝元を放れ桑門の行實に越鳥は南枝に巢をくみ胡馬北風に嘶きさかや鳥音類でさへ斯の通りまして人間不孝を救し賜はれさ凡人ならぬ御身にも血筋は同じ御涙に沈ませ賜ふ折こそあれこなたも同じ法の道踏分登る山伏の起忘れ草軒端のしのお忍ぶ我身にあらねども一紙半錢金剛の靈杖さつて突ならし己も氣儘の高慢我慢自慢を鼻に篠掛の天狗出立の血氣の山伏頭に頂く頭巾さへ傍りにきらく其顔色木影に休らふ旅僧をそれさ見るより聲高くイカニ御僧もの申さん我は出羽の國羽黒山の客僧なり御足下は何國御名は何さホ、拙僧事は日蓮さて法華經弘通末世惡趣に沈む輩化度せん爲の旅の者ム、スリヤ

兼々聞及んだ日蓮さは御坊よなよし面白く然らば貴僧と一問答イヤナニ今愚僧尋る一條詳に返答有れさ傍への石に腰打掛けイカニ日蓮今關東三分一は皆法花經に歸依し信仰する者すくならずと聞及ぶ左程學き法花經なれば奇特の程も承はりたしイヤトヨ正法に奇特なし元來妙經を信する輩は現世安隱後生善所安樂世界に生ずる事疑ひなしナニ安樂世界ハ、ハ、其安樂世界さは何國なるぞやコハ客僧の詞共覺えず西方佛土は極樂とすア、イヤ日蓮其西方に極樂あらば彌陀經の本來無東西さは何事元より東も西もなしささつて極樂を西方さばイヤハヤ經文もあてにはならぬはいコハ愚や若僧混沌未分清濁一元無極寂滅編く三世の

因果を示して無縁の者を引ひ結縁の者を尊き現世滅罪後世佛果の道理を説きて一切の衆生をさいごす然らば又釋迦の大意はホ、諸行無常一さい死を遁れずそれ生は死の始め死生の因なり其果なくんば生ずるものなし譬ば花は因にて實は果なり實の果そたちて花の因を殘し實を結びて果に至る是三世因果當然の理りされば日輪は東に生ずる因有り西に入るべき果を示して人を教へ西方極樂とす晝夜此喻しを蒙るこいへ共貧曠痴の三毒になやみて千般の苦患に沈む只佛心の觀念を忘れず南無妙法蓮華經と唱へ奉れば求世佛果に至る事安かるべしヤア言ふな日蓮眼前に不思議を見する程の行力もなく未來成佛片腹いたしなまぬるこき坊主の喻し此

善知は吞込まぬ、我修験の法さ言ふ
 は靈藏金剛兩部の旨を修し嶮山惡所
 を踏みひらき害なす惡獸毒蛇を退治
 理世安民の慈愍をたれ或は惡靈亡魂
 を成佛得脱させ日月清明天下泰平の
 祈禱を修す故へに内には忍辱慈悲の
 徳を納表に降魔の相を現はし惡鬼
 外道を威伏せり則ち兜巾篠掛は兵家
 の甲冑にひこし彌陀の利劍を腰にお
 ほい手に携釋迦の金剛ホーそれこ
 そ天竺檀特山阿羅々仙の持し靈杖に
 して胎金兩部の功德をこめたり釋尊
 いまだ瞿曇沙彌と申せし御時阿羅々
 仙に仕へ苦行仕賜ひや、功積り賜ひ
 しかば仙人其信力強盛を感じ瞿曇
 沙彌を改めて超普比丘と號、則ち其
 金剛を參らせたたりいかにもかゝる靈
 杖なれば我祖役の小覺是を用ひて山

野を經歷仕賜へり。我又羽黒山を出
 しより行ひ來る我行力今眼前に現
 はし見せんこそつくさ立て齒を叩き
 岩に向ひて珠數押もみ口に眞言くり
 かへしし祈り立ればあら不思議や
 丈餘の大石地を放れ虚空に登つてこ
 いまりしは怪しかりける次第なり、
 慧朝坊はしたり顔何ぞ日蓮我行力
 は眞此如く是にも返答有やいかに
 くホ、驚き入たる貴僧の行力さり
 なむら祈りあげたる其大石再びおろ
 す事難かるべしと言ふに山伏あざ笑
 ひハ、ハ、ハ、かほどの大石祈上げた
 る我行力祈おるすに何のものかは
 ドレ祈おるして見せんす又もいら
 だか揉みならし祈れどあせれごこは
 いかん巖は空に畫書し如く是はご斗
 り慧朝坊あきれ果てぞ居たりける。

いかに客僧慢言を吐くさいへども
 是に邪術を以て衆を惑す言ふ、
 汝其逆心を斷すんば中祈たわらす
 事あたはず今日蓮が實心を以て祈お
 るして得さすべしと岩に向ひて口の
 内妙經文を唱へ賜へば今迄空にさ
 まりし岩は次第に下りしげに法華
 經の威神力不思議と言ふもあまりあ
 り、日蓮御聲さばやかに誠や行路難
 は海にあらす山に不非人間反覆の内
 に有、汝今より強慢を斷ち法華經誹
 謗を改心し我弟子となりて法華經弘
 通の助けならば九品蓮臺の上に座
 せん事疑ひなしいかにくご仰有、
 善智とびしさつて頭を下げハ、コハ
 有難き御仰せ身不肖なるやつわれを
 御弟子となし下さる上は肉をさき骨
 をくだき法華經弘通仕らんサ、

土牢の段

竹本相生大夫
鶴澤友之助
竹本大隅大夫
鶴澤道八

人形

船頭彌三郎 吉田玉幸
娘 お舟 吉田市松
女房 お梶 桐竹紋太郎
四條金吾 吉田扇太郎
岩淵丹下 吉田玉徳
日蓮聖人 吉田榮三
日朗法師 桐竹紋十郎
組子 大ぜい

イヤ御供させり立る聖人頭を打ふ
り賜ひ汝誠の改心にあらず透を窺ひ
日蓮に害せんとする汝が胸中はや顔
色に現はれたり誠修善滅罪の因ご成
現來二世の善種さなるやサそれは三
世の佛説浮屠氏とするやサそれはサ
サア〜〜と詰かけられ我慢の善
智も長嘆し暫し詞もなかりしが何思
ひけん立上り兜巾すゝかけかなぐり
捨、珠數押切て聖人の御前に手を仕
へハ、勿体なし〜斯まで尊き名僧
の法華經弘通を誹謗せし我罪御赦し
下さらば有難き仕合と始めの強氣引
かへて涙と俱に訛にける聖人莞爾と
打笑み賜ひ、ホ、善哉〜誠の慚愧
なすうへは我法名の一宗を與へ日傳
と號へしと仰にはつこ有難涙、嬉し
涙の限りなく迷ひの雲を吹拂ふ師弟

の縁や圓通煩惱妙法華經は旅の空旅
の衣はずかけのそれにはあらぬ墨
染のせこうろうやく小寶山法るん石
今この世に功德の程こそ、

(床本) 土牢の段 (口)

有難き相模とは、さかなき國か口の
葉に、日よ〜と僧立地獄の種を時
上る龍の口に土室を構へ日蓮の御弟
子日昭、日法其外の熱原田中の信心
者、押込申す土の牢不借身とは云な
がら見るに哀そいやまさる。爰に住
馴海なれて、世渡る業は船頭の彌三
郎と云ふ者あり元來房州長狹郡三國
大夫重忠に仕へしむ、故あつて、當
所へしりぞき夫婦の仲にお舟とて、
今年十の一人娘。重箱持せ出來り、
牢の物見へ立寄てコレ坊様達、けふ

は、おれを作られた、佛師殿の命日
 のへ酒供養するさいふて嬢は酒屋へ
 走つた其間に、ぼたを、したが豆の
 粉でこかす間が、なかつた故あり合
 せた、ごまあへ一ツまいれ科人に食
 物をやるは御法度じやけれご是が、
 ほんの隣しらすじやドレ娘重箱おこ
 せご、物見からそつご渡せば向ふよ
 り連添ふ妻も信心の升めを買ふて歸
 る足ホー彌三郎殿こゝにかいのわし
 が受法した縁に引かれ、こなさん迄
 が法華の行者へ志有難ふござんす
 ホーそう思ふは尤じやが扱ふ聞け
 ば其法の祖師日蓮様は三國太夫重
 忠様のお子じやげな悪人の爲に、
 お家は没落爺御様もお果なされ、御
 聖様も行衛が知れぬこの風聞スリヤ

聖人様は、おれが古主の御子息じや
 から、いよ／＼おろそかには思はぬ
 ハア是はしたりそんな事さし知らな
 んだ、そんなら、げふは、お聖人様
 が、伊豆の伊東へ流人其の船の役目
 は願ふてもないこつちやぞへサイヤ
 イおいたはしいさ、云ふか勿体なう
 て、涙もこぼれるチーさ、様さした
 事が、げふは遠い旅立の祝ひじや、
 われも機嫌ようせいさ云て置いて其
 の様に泣かさんすりや、わしやどう
 やら氣にかゝる、チーこりやあの子
 のいやる通りじやはいな、上人様の
 御難儀は云ふて返らぬ、すい分共大
 事にかけて御供さしやんすが御奉公旅
 立の祝儀に、コレ一升買ふて來まし
 た、サア御出家様方へさ牢の物見へ

差入るゝ、ヤイこりや、もう坊様爛
 はぼたを、ふんだくにおまして置た
 重食じやよしにせい。ハテよござん
 すはいの、ほんの神様へ神酒上げる
 も同前サアこれから、こちが出立の
 さかづき皆打寄り彌三郎殿船中怪我
 のないやうに早ふいんで御酒一つチ
 いほんにそうじや御出船まで打祝ふ
 娘よこいと先に立ち親子打連れ磯づ
 たい我家へこそは立歸る。

(床本) 土牢の段

清月に雲かゝり盛花に風の恐れ有り
 北條家の賢をくらし儻々趣意にて
 東條判官譏言かまへ聖人を伊豆の國
 へ遠流の裁配陸路の檢使は四條金吾
 追立の役人岩淵丹下いかつむましく

あたりをばらひ五逆の罪人引ごこく
繩目救さず聖人を引奉る痛ばし
四條金吾は聖人の御縛めを解き参ら
せ陸路の制法サはまで船頭彌三郎へ
渡し伊豆の國伊東左衛門へ御預け船
中は心のまゝこの仰有難く思はれよ
ご面正敷言ひ渡せば聖人しほれし御
顔ふり上げ我にかはつて急難する牢
の内なる人々必ず苦しと思ふなよ不
經菩薩は打擲せられ覺徳比丘は劔に
討れ釋迦はあららに身を任す殊に末
法惡世の中法華經を弘るに三類の強
敵有て猶多怨嫉の災難有んこは始め
より言聞せし通り經文に明らかなり
今更驚くにあらず、おこ達の苦し
みはわづかな事日蓮が是までの大難
小松原にて疵を蒙り或は所を拂はれ

又は闇夜に押かけられ今は流人の成
る事も法華經流布の驗ぞや見よ
追付立歸り權實二教の軍を起し忍辱
の鎧を着て諸經中央最以第一の旗を
あげ妙法五字の劔をばき未現眞實の
弓に正直捨方便の箭をばげ權門八宗
の門に押寄悉く切り從へ法華折伏
破權門理の金言今に現はし見すべき
ぞ譬へ首は軍門に懸り身はししびし
ほになるとても五字の題目愈りなく
唱へ死に死するならば尊釋多寶は言
ふに及ばず十方の諸菩薩手を取り肩
に引かけて二聖二天十羅刹三十番神
幡天蓋璣珞けまんを指かけて寂光淨
土へ導擡ばん僅小國の主の告は五
十年に限る未來闍鞞の咎にあはじ後
五百歳をふるとてもまぬがるゝ事堅

からん、只忘れなよ、南無妙法蓮華
經皆是眞實法忍者ご唱へ賜へば人々
もほつご感ずるばかりなり岩淵丹下
すゝみ出えしれもない法華經ごやら
を弘めかり流し者になれば結構な
さま極樂寺の了觀りつしは身かため
に伯父坊今の世の生如來ご言ばるゝ
方の大敵切り刻んでも飽ばなけれご
ゆるかせな上意故助けてくれる。東
條の罰思ひし知れご勿体なくも踏たり
蹴たり、會釋もなく取て引立あはよ
くば打殺すかしめ殺さん下巧み、既
に危ふく見へたる所に何國よりかは
吉祥入道飛鳥の如く馳せ來り岩淵丹
下を鷲擡み十間ばかり投付ければ、
うんごのつけにのたれ伏、頓て吉祥
聖人の御前に手をつかへハハ、御家

來吉祥めが出家の姿御行衛を尋んた
 め永々の艱難、野に伏山に伏し木の
 根を嚙り露をなめ尋る方もなかりし
 所に房州にて囚れ賜ひ伊東へ流罪さ
 承ばり三日三夜さ夜を日に繼ぎか
 け來り候なり、花を折り水を汲俱に
 配所の宮仕へ何國までも御供と涙さ
 俱に申すにぞ聖人も御目をうるめ、
 志満足せり、さりながら流人の身
 の助をば召連人も如何なりさはいふ
 ものの弟子旦那も多きなか、おこそ
 が事は幼少より傍近く召遣ひ主従二
 世の縁を結び今又師弟三世の縁思へ
 ば深い過去の因縁、是より日蓮が日
 の字をかたごり日期と名乗り月西山
 にかたむかば日蓮伊東に有と思ひ題
 目怠る事なかれ日の東に出るを見

かしこに日期有りと思ひ御經讀誦の
 方させん、もしも互に此世を去らば
 寂光の都にて待ぞよ、日期とせきあ
 げ賜ふ御涙、日期を初めさし警固下
 部に至るまで袖を絞らぬものはなし
 丹下はやう／＼立上りエ、賣僧坊主
 のあほう力よふ手ひごいめに合せた
 な、む又金吾殿も金吾殿相役を取て
 ほるを見物して居らるゝはア、きこ
 へた流人坊主と一味なるか殊に日蓮
 が弟子旦那とあれば、一人も見遣す
 なとお上よりの言つけ家來と言ふあ
 ばれば坊主を貴殿見遣す心なら某は
 御前へすぐ東條殿へ訴ん、これ日
 蓮がさすわざとせひなき詞に四條金
 吾ヤア日期法師汝吉祥と言ひしとき
 東條判官が一子木工四郎を討たる科

廻り／＼て今日蓮が怨となる、其上
 今日日蓮の役人へ狼藉其罪又日蓮
 へかいらん我罪我と止ばせと教訓せ
 られ日期法師すつと出てごつかと座
 を組、我もと、下總の國猿田郡能天
 の里印東三郎左衛門が孫稚ふて父母
 におくれ建長三年の秋よりお傍の奉
 公伊東は愚天ばこそつ、地はならく
 火水の中へも御供と存せしお付まご
 ふ程お爲はせいで、がいとなり怨さ
 なる。御赦されて下さりませ、是よ
 り繩かゝり東條判官に切刻まれ、木
 工四郎が意恨を晴させ、何卒御歸府
 なるやうに、金吾様、お取なし頼み
 上ます、お聖人さま、おさらばと兩
 手をまはせば四條金吾、チ、よい心
 得、そふなうてはならぬ所と、神明

應護のばくの繩、法の爲さば言ひながら、見るも涙の種ならん、重ねて金吾船頭呼出し、先達て申付けた通り、日蓮御坊を汝の船に乗せ伊東八郎左衛門方へ渡すべし、船中萬事にサ心を付よま情をこめて言渡せば、長つて彌三郎、聖人の御手を取り用意の船に乗せ参らす、牢の内なる人々もわつごばかりに泣倒れ日朝も立上り御影見ては泣倒轉び伏のを岩淵丹下結構な法華經の行者、死扶持喚へこつて引立情なくも日朝を土の牢にほふり込み是でちつと胸が暗れたイザ金吾殿御同道さ先に立ば諸共に役目の威光鐵棒の首嚴重に立歸る船の中より聖人は牢の内なる日朝を打守り、打しほれ、正法は時至ら

ず、邪法はちまたに満々、天下の歎き今に來らん、其時重時先非を悔此日蓮をよびかへさんば遠からず目下暫しの内の艱難と思ひ題目忘るゝ事なかれ、南無妙法と別れの首題蓮の種の飛如く御涙にぞくれ賜ふ道よりはづして岩淵丹下家來引連れ取てかへしコリヤ、彌三郎日蓮を流罪さ有れども生置ては後日の邪覺流人坊主を渡せばよしさもないさ儕さも濱先へ引ずり上、こなみちんにしてくれん、者共來れさ言ふや否てん手に繩先引つ掴みぬい、聲して引寄る彌三郎はにつここ笑ひ、ハ、ハ、ハ、いぬかしたり、ほざいたり、十九の時より乘覺へた此船頭何百人が引くこても船を濱邊へ寄るかこ櫓追取

て向ふへ突立、ぬいさ漕出す勢ひに陸の人数は一時に、ごさくくくご引き戻され又ごつこいと引いて行く陸は大勢漕手は一人、危く見ゆる折からに鉤丁引提げ馳け來る女房、引つ張る繩を用捨なくすつかご切ば家來共はづみを打て砂まぶれ丹下は頓て起上り、コリヤ、コリヤ、家來共早く小船をせんさくして、あの船に追つ付ん急げ、ご言ひ付けておめきさげんで追て行く間近く漕ぎ寄せ大音上げサア渡すか船頭め、意地張さ聖人を引つたくつてうぬは沙水くらはずがご、言はせも立てず、彌三郎船張ぐつと突出せば、一段ばかり後すさり、戻すな者共ヤレ押、乗り移らん漕寄る聖人騒がず御珠數

北條館の段

竹本文字太夫

野澤勝平

人形

東條判官 吉田玉幸

宿屋入道 桐竹門造

代官黒澤荒藤太 吉田兵次

鶴遣ひ勘作 吉田光之助

北條長時 吉田文作

極樂寺了觀 吉田小兵吉

戴き浪に向つて七字の首題書せ賜へばアラ不思議や、元來貴き法華の行者八大龍王守護有にや俄に浪かぞえうくく吹戻し吹返し、丹下の船は浪の山、おりては登り、上りては眞逆様に坂落し數多の家來一時に底の藻屑となりけり。扱つても氣味よし心地よし是妙法蓮華の金剛りき時節にあいし有難さ、取楫柄も船歌も只地藏經、南無妙法蓮華經なむ妙法蓮華經、南無妙法蓮華經俱に唱る題目のおしむは名残りゆく名残、陸には女房が今さらにまた思ひ出す憂別れ盡ぬは御法ありむたき菩薩のうかぶ弘誓の船の彼岸にいたりたるや伊豆の國伊東が浦へこき寄る。

(床本) 北條館の段

二王の代に足切れ三王の世に照輝く刑山の印和ク玉光りは同じ光りにて時代ぞ玉の曇りなる、されば鎌倉の執權最明寺時頼禪門自ら禁戒をたもちたまひ生澤川に殺生を禁じ、たま背く者あらば罪に行ふ掟を定め座禪の床に閉籠り重時の嫡子武藏の守長時、公事裁判を聞き賜ふ評定の役人東條判官宿屋の入道御前に相詰め裁許取ざりなるころへ生澤川の代官黒澤藤太細付引かせ白洲に出、此者は勘作さ申す鶴遣ひ、禁斷の場所さしりなむら生澤川にて鶴をつかひ網を入候故早速召捕り申たり御沙汰次第にはからふべしと手柄顔にぞ

訴へける。長時の仰も待す東條判官
すいみ出、禁斷の場所にて殺生せし
は評定に及ばず節瀆の政道に行ふべ
し、ま言渡すを、宿屋の入道押留め
イヤ先待れよ惣じての科人は先づ牢
舎申付け科の次第をさくさ吟味し其
上大法に行ふが天下の掟アコリヤ勅
作さやら禁斷の場所さしらばよも網
は入まい定めて、しらずに網を入た
に相違は有まい、そふかゝる情の
詞、勅作は面を上ハ、ア御意の通り
私めは他領に住し者、近ひ頃生澤
邊へ移住禁斷の場所さも夢存ぜず何
心なく渡世の流行、向後きつこ御法
度を相守りませふ、何卒お慈悲に命
をばお助けなされて下さりませ、私
が御成敗にあづからば年寄つた一人

の母、幼少の悴女房まで三人うへ
死致します、さすれば一人が四人の
命、御憐愍をさばかりにて、涙さこ
もに願ひける。情知らずの東條判官
耳にもかけず尖り聲アア禁斷の場所
をしらぬまは上を偽るコナ横道者め
ソレ藤太そやつ詰め牢へぶち込み骨
をひしいで拷問せよ、はつここたへ
て繩先き追取り引立るを入道聲かけ
アコリヤアコリヤ手あらく致すなコリ
ヤヤイ勅作さやら今汝も申た通り了
簡違ひに相違は有まい、言譚の筋あ
れば申上よ評定して得さすべしと、
惠も深き一言に繩目もひたす涙の雨
後は我身にかゝるさは、白洲を立て
黒澤に引立てられて出て行く、長時卿
も憐み賜ひ罪の疑はしきを軽くせよ

こは古人の誠め萬事其心を以て、取
斗へよ然るに此頃鎌倉中に天變地怪
打つ々き、さるによつて、伊豆へ流
せし日蓮を呼返し少しは天變納るこ
いへ共父重時の難病今以て治せず、
名醫伯夷も申には、申の年申の月、
申の日申の刻に生れ出せし男子の生贖
を用ゆれば立所に平癒すべしとの一
言、何卒、申の年月揃ひし者あれば
金子をつかはし命を買取れよと仰に
東條すいみ出コハ君の御説では候へ
ども大殿の御病氣は實僧坊主の日蓮
を呼かへし賜ふ故の事、世に稀なる
申の年月揃ひし者を尋る手間で日蓮
を成敗あらば早速御病氣平癒仕らん
と兼て同意の了観さしめし合せし伎
者の讒言宿屋の入道押留めコハ東條

殿の詞共覺へず日蓮を刑罰有らば重時
公の御病氣平癒致すとの證據有や筋
なき讒言は却て御病氣の妨げ病ひは
醫に任すさいへばやはり伯夷が申通
り申の年月揃ひし男子を尋させ賜ふ
が近道ご申上れば長時卿ホ、我も其
儀に同意せり、先づ汝は松葉が谷へ
参り父の御容体窺ひ申せよ畏つて
入道は御前を立て急ぎ行、折ふし奥
より極樂寺の了觀律師基盤をかへ
御前に出、きのふは愚僧が心得違ひ
にて打負候へ共今日は工夫の妙手を
存じ付き申たればイザ一石を押し直す
長時卿笑坪に入りさらば一勝負仕ら
ふこそ著筒取賜へば了觀坊、君若に打
かゝり賜ひては何を申てもお耳へ入
す先づ申上度は先年流罪せられし日
蓮坊御赦免有て呼歸されしをおのれ

が智徳と高ぶり諸法無得道と他宗を
ないがしるに言破り關東三分一を法
花にすゝめ込み此御所中にも愚なる
女中下々まで日蓮を信仰する者すく
なからず御先祖代々の御菩提所諸宗
の寺々衰微退轉致しては國家の亂の
基ぬ、早く日蓮を死罪に行はれよこ
判官に目くげせし詞工に讒じける
長時公聞し召し、いやこよ日蓮を召
し歸せしは祖父時頼禪門、夢に北辰
妙見の示現を蒙り夫ゆへ彼を召し歸
したり日蓮が儀は先づさし置ききの
ふの勝負も基盤に向ひ石取たまへば
了觀も是非なく俱に打かゝる、黑白
二つの石の音、御前はひつそと靜ま
りける。かゝる所へ四條金吾一冊の
書を臺にすへ御前間近くさし出し、
はるかこなたに手をつかへハ、ア此

書は立正安國論と題し、天下泰平の
政の助けになるべき書なりとて、
則作者日蓮聖人より執達を頼まれ
候ご言上すれども大將は圍碁に打入
り現なきくせを見込みて東條判官ヤ
ア慮忽なり金吾、天下の政道に坊主
は頼まず、政道の助けなどとは案外
なる鼻入め披露には及ばぬ引裂捨ら
れよこ申す折柄長時は碁の負色にせ
いたる顔色、ハ、ア此黒石の聖法經
め、廣がるに持て餘す、いつそ切て
くれふ遁れがたなき龍の口さ石の生
死碁の戯れ東條判官つゝ立ち上りナ
ニ龍の口にて日蓮を切て捨よこな、
畏つたき馳け行くを金吾驚き引き
さいめコレサ東條切れよこは碁の石
の事、庵相有な言はせも立てすヤ
ア龍の口にて日蓮を切て捨よこの御

鶴ヶ岡八幡宮の段

(豊竹和泉太夫) 豊竹島太夫

(鶴澤清二衛門) 鶴澤清二衛門

人形

日蓮聖人 吉田榮三

東條判官 吉田玉幸

聖人御難の段

(豊竹富太夫) 豊竹源路太夫

(鶴澤友衛門) 鶴澤友衛門

人形

東條判官 吉田玉幸

日蓮聖人 吉田榮三

証邪覺ひろぐなご馳け出す、それや
つてはご四條金吾、後を慕ふて追て
行く。

(床本) 鶴ヶ岡八幡宮の段

一大虚を吼て萬丈大實を傳ふる習ひ
北條長時の盤上の戯れ詞譏者の爲に
誠となり龍の口にて日蓮を死罪有る
べき事極り鎌倉中を引渡さんご勿体
なくも高手に縛め怒馬に打乗奉り
警固の役は東條判官己が意恨のさし
抜生命ごかしの無成敗、鼻高々ご歩
み來る、信心の老若男女斯くご聞付
け巷に群り天に仰ぎ地に悲しみ泣叫
びたる其聲は四方に響きてかしまし
き、聖人口取をしはしごめ社の方
に打向ひイカニ八幡大菩薩、芳靈山
にて十方の法佛天神諸共に法華經の

行先ば水火の中にも救はんご誓約を
違ひ今罪なき日蓮が死罪に逢ふを見
捨給ふか、我もし死せば靈山にて其
違變の罪を釋尊へうつたへて糺さん
ご宣ふ詞も切れざるに俄に社鳩動し
白鷺一羽あらはれて、雲井遙に飛さ
りける東條判官聲怒らしヤア極にも
立たぬよまい言時刻が延る追立さ下
知に隨ひ役人共馬を追立て、

(床本) 日蓮聖人御難の段

龍の口には聖人を死罪の構へ土壇を
もうけ敷皮しきて四方には琴柱さす
股殿重に立ならべ檢使の役人東條判
官いかつらしげに床几にかゝり今や
遅しご待居たる、程なく下鏡に追立
られ、御いたはしや日蓮は繩付のま
いしづ〜ご仕置の座に着給へば判

北條長時館の段

豊竹綾太夫

鶴澤友若

人形

北條長時 吉田文作

了觀律師 吉田小兵吉

四條金吾 吉田扇太郎

官はしたり顔、邪法を傳へて諸人を
 惑はせし罰も當り首と胴との生別れ
 テよい様、ハ、ハ、ハ、やよいざまヤ
 平塚丹平早くづく入めが首討よ
 さまもにくていに言付れば太刀取り
 丹平承り研ぎすましたる棒箱の首
 切刀、拔放し兩手に持て振上る聖人
 は端然と御目を閉ておはします、忽ち
 一天かき曇り俄に鳴來る大雷天
 地も崩るゝ震動に驚く東條平塚はじ
 め眼も眩み身の毛立生た心地も並居
 る諸人上を下へこ、

(床本) 北條長時館の段

ハ、ハ、ハ、いかに長時は安き心も了觀
 は恥も人目も打忘れ疊に喰付ふるひ
 居る長時空を打眺めア、ア、ア、いぶかし
 やな只今にはかの天變は事こそあれ
 ぞ悟しむ折しも車輪の如き光り物、
 辰己の方より鳴來り空中に聲あつて
 法華の行者を刑罪せば北條の一家の
 子孫を絶し佛罰を思ひ知らせん太刀
 取平塚が冥罰を蒙るしるし是見よこ
 ぞふぞ投たる地ひきは雷の落た
 る如にて其儘空は晴にける空より落
 しは、いかなる物ぞ長時立寄りよく
 見ればヤアコリヤコレ平塚丹平が生
 首コハ、ハ、いかに心得すこ、いぶか
 り給ふ庭先へ、あはたいしく四條金
 吾馳來り君が盤上の御ざれ言切よこ
 おいせ給ひしを東條判官工の種とし
 日蓮聖人を引渡し龍の口にて刑罰に

行合川の段

豊竹竹竹竹
辰太夫
龜太夫
陸路太夫
本播路太夫
本葉太夫
鶴澤友作

人形

本間六郎左衛門 桐竹門造
四條金吾 吉田扇太郎

行はんと致せし故忽發天の變早々
助命の御墨附下し置れて然るべしと
息繼あへず言上す長時大いに驚き給
ひ扱は我著に戯れし詞を以て日蓮を
成敗せんさせしは東條が庵忽奇怪千
萬片時も猶豫すべからずと硯召れて
自筆のめん狀早々急げの主命に承
はるご裾ばせ折御前を立て、いた天
走り飛び如に、

(床本) 行合川の段

走る馬上に鞭を當てもみにもんで馳
け行く金吾、金澤にて向ふを見れば
本間六郎左衛門重連は馬煙りを立て
馳け来る、互にそれを見るよりも金
吾聲かけコレく本間殿御自分ば日
蓮の後を慕ひ龍の口へ行れしが何故
に歸られしやサレバく聖人を敷皮

の上に直し太刀取りの平塚丹平御首
を削んさせし所に俄に雷電光り物、
太刀は脆く折飛んで黒雲下るを見る
間もなく丹平が首はなし、さるによ
つて鎌倉殿へ右の次第を注進のため
シテ又貴殿は何方への早打なるぞ、
チ、不審尤、鎌倉の殿中も眞其通
り丹平が首御庭へ落下り日蓮を刑罰
せば北條の子孫絶さんご雲間にひ
く怪しの聲、それ故助命の御墨附龍
の口へ持參の早打、扱は左様か兩方
爰にて行合も是妙法の不思議ならん
某は鎌倉へ、チ、某も龍の口へ
御別れ申す、本間殿、ホ、片時も早
く急むれよいよく妙法蓮華經馬も
妙法蓮ぜんあし現世安隱日度しと
別れし所を末の世に行合川さて

龍の口の段

(床本) 龍の口の段

竹本 鍛太夫
豊澤 新左衛門

人形

日蓮聖人	吉田 榮三
東條判官	吉田 玉幸
平塚丹平	吉田 傳之助
四條金吾	吉田 扇太郎
平の大膳	吉田 玉市
町人	大 ぜい
在所の女房	大 ぜい
組子	大 ぜい

龍の口には上人一人安然として座し賜へば太刀取が首は遂に飛び多くの役人立すくばり、太刀は折れちり下部は倒れ檢使に立たる東條判官、眼色替つて片息に人心地もなく倒れ居る、上人重ねて合掌しアラ有難や衆生の疑ひ晴さんため清淨光明の身を現し刀杖ふかの法華經を後五百歳の末までも光り現はす龍の口爰ぞ本時の娑婆世界寂光淨土は外になし各我等が生死の中間諸天晝夜の現證は日蓮愷な證據なり人々疑ひ晴らされよと高聲にのたまへば貴賤群衆も手を合せアラ有難やと首題の聲天にも聞ばかりなり。四條金吾馬乗放し逸散にかけ來り、此のいを見てさもそ

ふすと東條判官を助起し水ふくませ正氣を付けコレサく判官殿アチ金吾殿判官どの長時卿より日蓮を赦免狀拜見有れと指出せば開き見るより不審顔エい命冥迦な日蓮又今の雷は何事ヤアこりや平の大膳つかまれたかアラ不便やと身の毛立ちこばやと恐れながらも佛罪を思ひはからぬ極悪人、此場の面目包まんご傍り見廻し聲をかけ、よいはく追善には日蓮め鎌倉を追拂ひ乞食坊主にしてくれんソレ家來共割竹で叩き立て、ぼひまくれこ下知の下ハツこ答へて下部共こはくながら傍によりいざ立ち賜へと割竹を手持もふるひあげかぬる眼を配つて強氣の判官肩ひじいからしつゝ立上り、ヤア手ぬるしく早くぼつたてくよこ、

食満南北氏新作
竹本津太夫作曲
鶴澤友次郎作曲

佐渡ヶ島

塚原三昧堂の段

豊竹つばめ太夫
豊澤 仙糸
竹本津太夫
鶴澤友次郎
レ(野)澤歌助
鶴澤芳之助

人形

童子 吉田榮三郎
童子 桐竹紋司
日蓮聖人 吉田榮三
筑後坊日期 桐竹紋十郎
遠藤左衛門尉爲盛 吉田玉松
女房千日尼 桐竹政龜
四條金吾 吉田扇太郎

主の言ひ付けは是非なくも早立ち賜へ
さ打立て。聖人は恐れもなく、しづ
く御座を立賜ひ誠に靈山にて誓を
忘れず十方の諸佛諸天善神別して鶴
が岡八幡釋在の約を變ぜず法花經の
行者を救ひ賜ふかや、ア、尤ざぞ
有ん、法身地に落ちて廣ぐ一切の三
寶を供養するこは今日蓮が身の上な
らんいよくまさる法の道拂はず共
出行ん兼て宿谷の入道へ渡し置たる
安國論上聞に達するやふ傳へてたべ
頼基さおじも恐れもなき傳言、ゆう
くゞんさ出賜へばわつと泣出す貴
賤の男女のふいさおしや上人様何國
をさして行賜ふ伊豆より歸參遊ばし
てアラ有難や嬉しや悦ぶ間もなき
御災難今お別れ申ては命の内につ
か又お顔を拜む事有らん名残り惜し

や悲しやお袖に取付衣にすかり泣
さけびたる其聲は巷に滿てあはれな
り、上人も御落涙我に受法の方々は
皆日蓮も子さなれば譬何國に住さて
も契りは朽す今よりは我戀しくと思
ひなば授し首題を愈らす日蓮が名を
呼さ思ふて唱へ賜ふべし此災難は蝕
の雲ついに晴れて程もなく必ず廻
り逢べしと宣ふ内も追立つる下部お
杖は八つにさけ八品一部の法向も未
の世までの

(床本) 塚原三昧堂の段 (口)

さる程に日蓮上人は龍の口の御法難
ふしぎにお命つゝおなく再下る殿
命は佐渡へ流罪の御うき目、然るに
この國の念佛の行者昔北面の武士
遠藤左衛門尉爲盛阿彌陀如來を信仰

のあまりに今は阿佛房あぶつぼうひそかにしのぶ塚原つかはらの三味堂さんまいどうに程近くひざりうなづき聲こゑひそめ阿彌陀あみだ如來にょらいにお誓ちかひ申し上げる念佛ねんぶつ無間むげん禪天ぜんてん魔真まじん言亡ごんむつ國律こくりつ賊ぞく諸宗しよしゆを罵ののする日蓮にちれん坊人ぼうにん手てをかちまでもなし法敵ほふてき打うちさり災わざの根ねを断たちまふすべく南無阿彌陀佛なむあみだぶつと唱なふる爲盛たかもり千日せんじち尼には走りよりマア／＼まつて爲盛たかもり殿どのフムと云いふは妻つまの千日せんじち尼にが阿彌陀あみだ如來にょらいに誓ちかひを立て日蓮にちれん坊ぼうを打うち取るにナゼ止とめるそこのきおらうこはげしき言葉ことば妻つまは悲かなしと押おしかくし、もし阿佛房あぶつぼう殿どの吾等われらめをさば佛ほとけの道みちこくにも悟さとり法號ほうごうを受けて有ある髪かみの比丘びく比丘ひきう尼にそれに白しろ又またを血ちに染そめて阿鼻あびの地獄じごくに墜おつる氣きか上人じやうじん様さまはこの世よから活いき佛ほとけにておわします殺生せつじやう戒かいはやめてたべ拜まがむわいのと手てを合せば

爲盛たかもりはさつてつきのけくぞ／＼こやかましい活佛いほふつの日蓮にちれんなら鎌倉かまくら殿どののお叱しり受けこの佐渡さつどへ流ながし者ものにはならぬ答こたまして諸宗しよしゆを罵ののする上念佛じやうねんぶつ無間むげんさぬかせし坊主ぼうしゆ法敵ほふてきをうちこるは、これも方便ほうべん佛弟子ぶつでしのつこめなるわすさりおろうこれめつくる妻つまはあるにもあられぬ思おもひコレ阿佛房あぶつぼう殿どのお前まへもげんさい問答もんたうして上人じやうじん様に云いひまけたを遺恨いこんに思おもふての又物またもの三昧さんまいであらうかなエ、黙だまれ女房にようぼう男をとこのする事こと女をんなのさし出でるこころでないわ、のけく／＼と争あうさう夫婦ふうふ雪ゆきはしこゞこふりしきる地獄じごくの責せきか八寒はつかんのこの世よからなる修羅しゆら道の業苦ごうくの程ほどぞ怖おそろしけれ如何いかはしけん千日せんじち尼にドウとまるべば南無三寶なむさんぼうさすが夫婦ふうふの恩愛おんあいに抱いだき起おここして如何いかいたした怪あや我われはしせぬか

さいたわればもうし妻つまをいたわるお心根こころねその佛性ぶつじやうを其儘そのままにナゼ上人じやうじんをうたるゝぞ助たすけたまへと諷ふむれば弱よほる心の爲盛たかもりはたよりも悪あくしと打うちうなづきフム一旦いつたんは妻つまの言葉ことば立つるも佛ほとけへ報恩ほうおんのこれも一つの道みちぞかしうれしう御座ござんすそんならこの儘まま歸宅きたくいたして又またをおさめん忝かたじけなしとふしおのみ底そこの心こころは白雪しろゆきの道踏みちふみわけて兩人ふたりは我家わがやへこそは歸かへりゆく。

(床本) 塚原三味堂の段

諸もろのかり濁劫じやく惡世あくよの中には多く諸もろの恐怖おそあらん惡鬼あくおに其身そのみに入いつて我われを罵のの毀辱きじやく辱じやくせんそ妙法華めうほふけ經勸持きんぢ品ほんにこそ説とかれたれば此處こゝに遠流えんりゅうの身北國みほくこくの寒山かんざん佐渡さつどり島心しましん身共みどもに塚原つかはらや如説修行にょとくしゆぎやうの三味堂さんまいどう雪ゆきは一丈軒いちぢやうけんは

六尺風荒波に横さほる銀河にあらぬ
白妙や不輕菩薩を今目前法華の行者
日蓮上人扉を開きふりしきる吹雪の
空を見やりたまひアまこまやな竺の
道生は蘇山に流され法道三藏は面に
火印されて江南に流罪の身さなる是
皆法華經の德佛法の故なり吾は日本
國東夷東條安房の國海邊の旃陀羅の
子徒らに朽ち果てん身を法華經の故
に捨てまいらせん事これ石を黄金に
代ふるに非ずやアラ尊やま御自作の
釋迦牟尼佛の御像に御手を合せ唱題
の御聲もいとすみ渡る折から雪を
かさこそ人こそ來れ島の子がぼだを
あつむる高調子波よ來い〜此處ま
でござれヨオイヤサ、舟に帆あげて
帆あげて舟に驚の御山の麓までヨオ
イヤサ、唄ひつれ〜雪の軒來かか

る童子を見やりたまひヤヨ童、明暮
人の來らぬ庵殊に見馴れぬおこご等
は處の者か但し又よその里より來り
つるかたづれに童子は聲清く上人様
がこのいほりに一人淋しくおゐでこ
聞きお慰さみさ存じまして二人で此
處まで參りましたさやさしき言の葉
嬉しくオ、よくぞたづれまゐりしな
去歲今月十日相州依智の郷を立ち久
米河の宿あまに見て越後の國寺泊そ
れを本土の見納めにこの大海を渉り
來て雪より雪海より海のその外は慰
さむよしも荒磯の島守る翁さなりは
つるわれを音のう嬉しさをこく〜
島の物語めづらしき事聞かまほし
のぞみたまへばわらへ達扇さり出し
身をかまへそらふ手振の面白や天津
島根にゆるぎなき國の柱や大舟の人

を渡しの惠の深みヨイヤヨイソロエ
ツシツシエツシツシ、わだづみの底
龍神の聞きも洩らさぬ八の巻蓮華も
ひらく八葉の水のにこりにしまぬ華
露を玉さぞきよげなる、ヨツシツシ
エツシツシ、それがあらぬかこの島
の黄金の花のふり候、ふるや散華の
まこさわに淨土まこそは申すなれ、
ヨイヤヨイソロ、エツシツシ、エツ
シツシ、唄ふも舞ふも上人をたたふ
る童いぶかしさこなたは威儀を正し
給ひ優しの童よくも來りてなぐさめ
くれしぞさりながら不思議なるおこ
ご等そもや何處より參られしぞ語り
たまへさたづねれば、二人はいつか
白絹の羽袖に似たる御衣スツクさ立
つたる氣高きよ過ぎつる頃龍の口の
御道すから鎌倉八幡社頭にて御僧の

口づからヤヨ八幡何さて法華の行者
 をば守らせ給はぬ不思議さまよ諫め
 給ひし御言の葉、今ぞ使ひを送るべ
 し頭の白き鳥こそ軒端に近く飛びこ
 うならば御赦免の日ぞ知らるべし夢
 疑ひ給ふなよ、さらばくさばかり
 にてあま白雪さちりししく靈鳩すがた
 は消えて失せにけり上人莞爾と笑傾
 けオツ扱は八幡大菩薩の吾を守らせ
 給ふしるしか、今ぞ思ひ當つたり御
 經に曰く天の諸の童子以て給使を
 爲さん、刀杖も加へず毒も害するこ
 そ能はじこか頓て赦免の日をまちて
 一天四海皆歸妙法我等の望みも近き
 に成就アラ嬉しや添げなやこ如來の
 尊像ふしおがみ扉をさざし入り給ふ
 誠に本化上行の再誕こそ拜まるゝ
 折しも庵の軒近く忍びよつたる阿佛

坊爲盛念佛の怨敵法の仇、身はぬれ
 鷺の小船を狂ふ刀の目釘しめやかに
 おのれ日蓮眞二ツさかたへにこそは
 身をひそむ影白雪を踏みしめて何ぞ
 千里の山河を越えて波濤のおきふし
 きや、やつれ果てたる筑後坊恩師を思
 ふ誠心にやうくたづね日明が埴生
 の小屋にたどりつきこれかを見るや
 目もうるみ聲細々と呼び立つる師の
 坊はおわするか筑後まゐつて候そや
 弱る心を取直し、遣ひよる竹椽師弟
 の縁し耳にこたえて上人は扉のすき
 より見給へばまごう方なき日明法師
 思はずまるび出たまひ、サ云ふは筑
 後坊日明ならずやオツ師の御坊にて
 ましませしか筑後であつたか、お師
 匠様さ、たえて久しき對面に先立つ
 ものは涙にて軒の水柱や雪解の水ぬ

る、秋の右左、御懐かしや無事なる
 かご互ひに手ご顔々顔見上見下す
 嬉し泣き、しばし言葉もないじやく
 り上人御座をあらため給ひ久方の對
 面に取亂せしは不覺の至り筑後坊御
 身は吾と諸共に囚らへられて土牢に
 法難うけし身なりしに如何致してこ
 の孤島へ誰に許されて來られしぞ、
 たづねに日明聲うるませ師の御坊の
 御消息に牢をば出させ給ひ候はゞ疾
 くさく來り給へ見奉つり見えたてま
 つらんその有難き御仰せ宿谷殿の情
 にすがりしばしの程を許されてそも
 鎌倉を立出でて人目しのぶのすゝき
 にあらぬ野末の床の假枕幾夜寝ざめ
 の寺泊やうく波濤のり切つてこれ
 までは來つれどもこの大雪に道さへ
 知れずたづぬる人も荒波の磯にさま

よふ島千鳥、泣くれしものびてはる
くぐと、これまで参りまして御座り
ますと云ふも寒氣にさぢられて齒の
根も合はぬふるひ聲、哀れき見やれ
ど身命を惜しまぬ上人御聲高く未練
に候、筑後坊うき事のなほこの上に
つもれかし限りある身の力ためさん
日蓮の弟子旦那は護法弘通の其爲に
身命は惜しまぬ答御身鎌倉をあさ
にしてここへ來らば何者か、かしこに
あつて法華經の折伏の修行誰かする
まみえやうこそ申せしは靈山淨土を指
したるなれ佐渡ば小さき孤島なり、
この島の教えは日蓮一人にて事足れ
り、ハヤ／＼鎌倉へ歸られよ寝ても
さめても法華經の弘通に一心こもり
たる恩師の言葉合掌の肝にこたへて
筑後坊ハツミ斗りに兩手をつき御教

訓今更に愚かの日明が胸にめいじた
りさりながらこの島守の朝夕を誰か
供養せん勿体なしせめてお傍にあり
海山より高き法恩の萬分一をつく
さんさすがりなげけばさつてつきの
け過去の不輕菩薩は法華經の御爲に
杖木瓦石を蒙り師子尊者は頭を刎れ
らる天臺大師は南三北に七あだまる
い皆是御法の爲ならずや日蓮は諸天
善神守護の身ぞ筑後坊には都弘通の
大任あり、ハヤ／＼歸りて不惜身命
逆化の修行を怠るまいぞ、サササ其
お言葉背くにてはあられども弘通の
爲には猶更に大切な師の御坊如何
に御法の爲さばゆへこの北國の雪の
空、戸さしも嵐吹き通ふ八寒地獄ま
のあたりせめては櫓の御給仕も又立
寄るをハツタされめつけ日蓮さて日

期さて私の命にあらず皆法華經の行
者ならずや凡情のなさは墮獄の因
縁さく／＼此處を立去りおれさげ
しき言葉是非なくもハツミ計りに立
ちあがれど、はる／＼來つる孤島の
軒、逢ふが別れの束の間を悲しやの
うと見返ればさすむ師弟の恩愛に凡
夫にかへる憂き淚檀特山の涙別も、
かくやと計り雪解して落ちて流る
谷川の水嵩まさる如くなり、日明や
う／＼氣をさりなほしもつたる包さ
く／＼も師の御坊に奉らんぞ御たし
なみの橋を持参いたして御座ります
日明の身にかへてお傍へお置き申し
まするささし出せば打いただいて如
來にさ／＼筑後坊の供養日蓮嬉しく
思ふぞよ佐渡ば吾等の本懐をあらは
す爲には大事の場所折伏逆化の道し

るべ御本尊をば願はし申さん何かは
 やがて歸國の上エツイヤ歸國の上は
 弟子檀那に日蓮無事と傳へられよ紙
 さへあらぬ佐渡島よしなに披露あ
 るべしと唱題の聲期かに更に餘念は
 なかりけり、それではどうでもエイ
 未練であらふぞハツタミとささす庵の
 扉雲山萬里師弟の別れ雪はしせきも
 わきまへず降り積む中を筑後坊ま一
 度お顔さふりかへりよれば吹雪にへ
 だてられ見へわかぬ師の御かげをの
 び上り見る雪の道すべる足もと踏み
 しむる氣強く追ふも法の爲さすむ別
 れの惜しまれてソツミのぞけば立戻
 るえにしも深き白雪をあこに見すて
 り日期はまた鎌倉へ引かへす心のう
 ちぞ哀れなりあこ見送つて上人は思
 はず椽へまるび出で許してくれよコ

リヤ日期波濤へだてしこの島へはる
 くたづね來たりしをつれなく返す
 も法華經の如説修行の爲ぞかし恨み
 ぞばし思ふなよ恩愛慈悲の御なげき
 尊くも亦けなげなり。爲盛はこらへ
 かれ、太刀なげ出し雪に手をつき驚
 き入つたる上人の御志 御法の爲に
 御弟子を追ひかへさるゝかゝる尊き
 ひじりさもしらず白刃を當てんさせ
 し大逆無道のこの爲盛イテ存分にめ
 されよかし、大地にドウミ座をしむ
 れば上人ニツコと笑傾むけ愚かや爲
 盛すでに龍の口にて此首うたれんこ
 せしきへ諸天の加護を受けたる身ぞ
 御身の妻の千日尼ひそかに吾に仕ふ
 る此頃おこも心ひるがへし法華經
 の爲につくされよと聞くに小かげを
 千日尼走りよつて有難涙上人様だん

くこのお情有難う存じまする兩手
 を合はしふしおがめば妻の供養は阿
 佛坊の供養今より日得さあらため折
 伏の修行めされよかし、ハツハツミ
 頭を白雪にうづめうやもう其折から
 飛びかう軒のむら鳥上人きつこ見た
 まひてオツ歸るべき時は來にけり鳥
 崎八幡大菩薩の御託宣今ぞ思ひ當つ
 たり開くや法のはちすばに東天紅さ
 くだかけの惠はふかき日の光り思は
 す合はす三人の手南無妙法蓮華經の
 今又も都にかへり咲き末世を救ふ上
 行のその再誕の佐渡島、有難かり
 ける次第なり。

勤作住家の段

(床本) 勤作住家の段 (口)

豊竹駒太夫
鶴澤重造

豊竹古靱太夫
鶴澤清六

人形

庄屋徳藏 吉田玉次郎
勤作の母 吉田玉七
經市 吉田文二郎
本間六郎左衛門 桐竹門造
女房おでん 吉田文五郎
勤作の靈 吉田市松
日朗法師 桐竹紋十郎
日蓮聖人 吉田榮三

世渡りも甲斐なき業か其名よふ波木井の里生澤川の濱先に貧家の軒のかげ作り元は下總平賀の何某今は鶴つかひ勤作と成果し身の程もなく殺生禁斷の咎にて地頭の半へ押込られ妻子や母の泣さげ聲も涙に息づまり鶴の咽しめし報ひぞと思ひやるさへ哀なり、所の庄屋徳藏小首傾け入り來り内儀お袋内にかさ言ふ聲もひそめければごなた様や母親が孫引つれて立出る、ア、イヤおれじや、是は庄屋様よふお出さもてなす内にも半者せし勤作が身の上を思ひ忘れずしをれ居る。ア、扱此間ば村中もいかふもめます前の庄司様の御領分さば違ひ東條殿の支配に成てから地頭の

藤太殿主の威光を鼻にかけ何のかの主人足の費、此中も聞かつしやれ日蓮さやらいふ坊様の母親を村々へ言付け草を分けての詮議是を思へばこなたの息子の勤作はよい時に半へ入られまあ人足代わからぬさばいふもの、殺生禁斷の所へ網を入れ捕まへられた事なれば命を取ふさいふも尤、所をこの徳藏の代官の顔面を見込五十貫の科料で扱ひまんまも命取りさめたれ共何を言ふてもびたひらない才覺のならぬ此内三日延し五日延しけふが絶對絶命日の暮限りの命ごふで埒が明くまいは思へ共天から降つたことも有ふかさ本の腹へらしに來ましたシテおか様はごこへでえすさいふに母親サアあの子も其事を苦にして金の才覺に出られまし

たむ有る様でないものは金あの人む
 何こそ才覺致されましよア、イヤ、
 そふ斗りも言はれぬ女の藏から家屋
 敷の出た例もござる餘りきなく思
 はしやるな内儀のいり豆に花の咲
 まいものでもない悲しい中へおか
 しみで力付るもやさしけれ、そぼふ
 りし雨に立寄る家の影本間六郎左衛
 門重連は北條家の御意を受けあてな
 き事に旅立、暫し晴間を軒の下、
 表の方にすめば内には庄屋がたげこ
 のみくヤほんにけふは此孫の經市
 が誕生日、祝ふて一盃婆様ごふじや
 のハテそりやおまへの覺へ違ひ八年
 後の七月七日の申の刻の生れ、い
 か様それくしかも其日は庚申で勤
 作も連立つて参つた後の間内儀がこ
 るりさへり出したヤレ男の子を産だ

ご長芋で祝はれたヤ其長芋で思ひ出
 した爰の裏の自然響を一本せしめて
 逝まじよさいふも内儀を待じほの甘
 い辛いを噛分る庄屋が心は居催促そ
 れさいはずに奥の間へ行を待兼折よ
 しと雨やごりせし六郎左衛門門口よ
 り指覗き御免なれ御老母さしづんく
 入て經市が顔つれくご打眺め今咄
 しの有つた八年以前七月七日申の刻
 の生れの男子は此子がハテよい子じ
 やのチーアノ庄屋殿とした事があら
 れもない高咄し表へ聞へてホー、
 ーチー恥かしいハイ庚申子でござり
 まするさ聞いてうなづきム、珍らし
 い生れ性傳へ聞く申の年月刻限まで
 揃ひし生れば何によらずものゝ上に
 立つて名を萬天に上ぐる武士の家に
 生るゝならば適の侍、失禮なが

ら貧家の埋れ木さなさん事エ、残念
 至極さ響つそやしつ重連が詞に老母
 は嬉しさの孫に餘念もなかりける。
 六郎左衛門膝すり寄せヤナニ御老母
 何こそつじ乍ら此子を身にたもるま
 いかエイヤさ定て其方は祖母であら
 ふが兩親にも相談し金銀いらばいか
 程でも望み任さんまづ當分の禮物さ
 百兩包投出せば老母は悔りム、此お
 金を私にホー些少なむら此子さへ身
 にたもらば未々までもお身達を見捨
 まいイヤモウ末の事は思はれませぬ
 當分此孫が爺親の命がけりに成金ご
 ふした御縁で有むたい見ました所む
 お歴々さまそふなむ定て御世継様が
 なふての事が但し柄口そふに見へま
 するによつて御體代に共思し召てか
 マア何はさもあれ忝い親共に相談

に及ばず成程わたしの上ませふ氏も
下總にて平賀氏馳かしい筋でもなし
由緒書が御入用なら認めてあげませ
ふかご金がほしさに後先を思はぬ老
の悦びは後の哀さ知らざりし六郎左
衛門笑壺に入りイヤ由緒書は追ての
事すりや兩親にいはいでもお身一人
の了簡で事の濟む事がハイそれほか
れて二親共いさい内から親の手は
なし人中見せに出したいと申て居れ
ど今年八つせめて十にも成つた上の
事さ、わたしがまとめて置ました。お
侍のお家へ参るは此子の仕合せ、
お國は何國おまへのお名はさごへば
重連ホーウ某は本間六郎左衛門と
いふて鎌倉武士ちご用事有つて此波
木井の町の旅館屋に一宿致す明日の
儀共思へど親達も名残を惜み彼是も

有げ氣の毒只今同道致したいが直に
渡しくれられふや何か扱こつち
もちつご急用で此お禮金が申受たし
コリヤ經市爺が爲に奉公にやる、必
す戻りたいさいふなよと言い含むれ
ばコレ祖母様爺様の爲ならばごつこ
へ成りとも行ませう早ふやつて下さ
れ、チイヤさしいよふいうたなマア
くお侍様聞かしやつて下さりま
せあれが年端も行かぬ身で親の爲な
らごつこへなりとやつてくれと申ま
す響さしやつて下さりませと孫が命
は妙薬に死に行さば神ならぬ知らぬ
老母と經市がぐわんぜんない稚顔見る
に本間は心のうちハア、是非なきもの
は主命と忍び涙にけれけるがハ、ハ
ハハハハ、ハア、老母の可愛そふ
な顔と稚子の發明を感じ入つて涙を

こぼしたサア暇乞も濟だらば日もば
んじるモウ参るハイ波木井の町
に御一宿なら親共が歸り次第よつ
と逢ひに上ませふ何かと隙入りお侍
遠かる御勝手次第連てござつて下さ
りませ經市まめで暮せよと髪かき撫
て暇乞六郎左衛門心せき然らば左様
に致さふハテ思ひ切りのよいマ老母
じやよな子も子なりアいか様以前が
思はるゝいざ同道と引連れる見送る
祖母も行孫も後の哀は白雲の雨か涙
か傳ひ道伴ひ宿所へ立ち歸る。庄屋は
一間で様子を聞勇みすゝんで走り出
でコレ婆様目出度い事が重なつた息
子の勤作を助くる金を貰ふさいひ孫
の經市が出世分離の悲しいが直に
悦びの元まあ一時も早ふ冥金を差上
げ勤作の命を助け餘つた金で悦び事

お代官へ行きましょナ、太儀ながら此金で早ふ息子を連れて戻つて下さりませナ、心得庄屋徳香込ださ餘所の世話をば身に取て悦び勇んで……

(床本) 勘作住家の段 (切)

行水の淵瀬と替る世の中に盡ぬ思ひの晴やらすくもる日も立八つの鐘身も金事にさつ置つ胸を碎ひて立歸る勘作が妻のお傳内入悪く打しほれお袋様今歸りましたナ、待兼ましたはいのよふ戻つて下さつたさ機嫌よい程猶氣の毒さればいな方くの近付を歩行廻つて頼んでも思ふに任せぬ金銀づくア、コレ其事なら苦にして下さんな其金は調ひましたはいのエ、サア深い様子は後での事、何角差置庄屋殿の今勘作を迎ひに行れたは

いのエ、ソリヤマアほんまの事かいなさ悦び合こそ道理なれナ、嬉しい筈く、まだく後に目度い事有ぞいの勘作が戻られたら女夫ならべて叫しましよアイく、マア何角は差置連合の命はばり、出来にくい金調ふたば佛様のお蔭故是程有難い事はござりませぬ、今も今さて戻る道でさる人の咄しには鎌倉の執權北條重時殿世に稀な病に付申の年の年月揃ふて生れた男の子の生贖を買はんとて方々を尋れ共金はしがる人は有ても子を賣ふと言ふ邪見な者のないも佛法の世の中さ後世を願ふ衆の自慢夫の命のせつはに成て金の工面の出來たのも天道様のおあてかい目出たい事でござんすぞ勇詞の先折てイヤコレお傳何と言やるぞ、鎌倉の北條

重時殿の難病にて申の日申の刻に生れた男の子の生贖さやらが入のかやサアそふ言ふ噂でござんしたはいのホイハアはつぞ老母は胸も張裂思ひ取り返さふにも金ばなし、立たり居たり身をもんでわつと斗りに伏轉べばお傳は恠り氣も付ず老母の傍へ差寄てコレ申しお袋様コリヤ又例の御持病か何ぞ心にさばりしかさいたばり起せば胸撫おるしイヤ是はつかへ持のならひ今のそなたの咄しを聞いて若其尋る子も有さ知ば天下の權柄取もかれ命取るゝものならば其親々の身に取て歎きの程はいか斗りさ餘所の事まで悲しさを身に引請るは年よりの癖と思ふて下されさ入わけ隠す袖袂絞りかぬればハテわつけもない誰かマア打明て生れ年を言ふ人かこ

ざりましよ近い譬はこちの經市生れ
年は合たれ共人も知られば言はぬが
秘密我生れ年を人に言はぬと言ふ事
もこんな事でござりませぬ嫁の詞
はいさい猶胸を痛める母親が居るに
も居られずかい立て何角は後に勤作
が戻つて來たら知してたも袖に涙
をおしかくし泣々入こそ道理なれ、
お傳は後を打見やり常から氣細いお
袋様手詰に成た金の事ごふして急に
調ふたそれ聞ふ物、氣わたり胸に
ひやくや暮の鐘、夫を待ば子の事も
わすれてそれ氣も付すマア灯を燈
して置ましよと取出す火打行燈の土
かはらけの土色も牢者の罪は殺生の
報ひと今ぞ思ひしる主の勤作くらま
ぎれ打しほれたる門の口、お傳く
と音なふ聲、すかし眺てヤアこちの

人勤作殿コレ明けても暮れても三人
が泣て斗り居たはいのよふまあ戻つ
て下さんしたお袋様の勤で命乞ひ
の金調ひ嬉しい顔を見まするご手を
引内へ伴ひて夫の膝に取付て悦びな
みだにむせびける。勤作も打しほれ
有難い母のお慈悲と明暮これしそ
なたの歎、心が通じて歸りしが思へ
ばく勿体なやいつ孝行な事もなく
お世話の上に歎をかけ未來の罪も恐
し、言ふまでもなければ共此上なむら
し、母を孝行にしていたも悔歎げば女
房がアコレ、其悔言最入ぬお袋
様のお待かれ今迄こそなれ是からは
何ば孝行にせうと儘イヤ孝行の次手
に經市おしほらしいそれはくお前
をこがれ泣て斗り居りました。コレ
早ふ來てさ、様に逢ぬがほんにさつ

きから顔も見ずごに居るぞ經市
と立寄る一間母親は涙なむらに轉び
出でヤレ、勤作健で戻つてたもつ
たかご取付歎げばお傳は押分けモウ
くく泣事はござりませぬあつさ
りご打潤みて悦んだむよござんす又
言はれ是程目度い事はなはい何ば
嬉し涙でも不吉くご轉じかへ此經
市は寢て居るかご立上る福老母は引
留イヤ經市は内には居ぬム、そんな
りやごこへ行ましたへチ、行先言て
聞そふと、隠し持たる懐叙を咽にお
げと突立ればこれはと驚く勤作夫婦
コハ何故の御最期ご取付歎くを老母
は突退息をつぎ經市も往た先は相州
鎌倉松葉が谷エ、チ、悔りは尤く
最前庄屋に思はずも孫の生れた年月
の咄した門の口様子を聞たか侍

が經市を見てほめそやし養子にくれ
いと禮物の金を見るより飛立斗り勤
作を助る過料の金天から降たこ心得
て孫の命も妙薬の替に立さば露知ら
ず其侍にやりましたと語るを聞いて
女房はわつこ斗りに泣倒れ前後不覺
に見へければチ悲しい筈く救し
て下され生れ付たる發明を見込で望
む無理所望、御大身のお侍其お世
繼となるならば嬉しや孫が出世ぞこ
思ひ込たが因果が罰かこなたが戻つ
た上の事何角の相談せふ物と思へど
金に心はせく其上にまた經市も暇乞
にかい様か泣しやつたらわしも悲し
い後から便りする程に早ふやつて下
されと命取れに行共しらす氣をせく
孫と手詰の金、變敗に合はぬ其内に
と、貰ひに来たあつちより子をやる

方から心かせき渡したは老母が誤り
こなたが戻つて重時の難病に申の年
申の月申の刻限揃ふたる生れ年の男
の子の生臍薬に入るさいやつた時、
老母お胸には焼金をさゝるゝよりも
猶せつなく五臟六腑をしほりしぞや
後を暮ふて走つたさて戻しもせまい
し金もなし直に其場て自害して言譯
せふさは思へ共せめて此世で勸作お
命冥加な顔見てからと今迄命ながら
へしは老に惚たる心の迷ひ間違ひ事
と諦めて嫁女堪忍して下されく
く救してたも勸作二人の中のはん
そ子を殺した祖母は此通りと劔を抜
ばがつくりと七十一期を名残りの命
此世の縁は切にけり。ノウは申しお
袋様親の替りに先立て死だあの子は
孝行者何の悔まふ泣やしませぬ早ま

つた事遊ばして悲しい上の悲しみは
聞へぬわいのと取付て泣き悔めど詮
方も涙の種さ成にけり、夫は始終泣
しほれ物をも言はず居たりし誠
親子は一世にて詞かはす間もなく過
り賜ふか淺ましや其元言へばわれを
助んぞお慈悲故御身に備る地獄の
縁情なやいとおしやと泣こもれしが
涙を押へいづればかなき世の中に愛
別離苦は有ならひ歎くな女房後世こ
そ大事佛檀へ御明し上稱名唱へて野
邊送りこなたへ來れと打しほれ一間
へこそは入にけれ。後見送りて女房
は老母の死骸泣くも取片付る表の
方庄屋の徳藏いつきせき涙片手に走
り付ア、コレくお内儀ハアこな
たはもふ泣て居るか、扱拍子の悪る
い時はする事なす事皆ぐりはま地頭

の方へ鎌倉から東條判官さやらが来て過料で濟すは怪我過ちの科人現在殺生禁斷の所ぞ知て鶴を遣ひ大分の魚を取たは盜賊同前助る事は罷ならぬこいこしや勘作殿は仕置にあふて死なれたはいのアー金程大切な寶はないと思ふてもまさかの時には金銀も何の役に立ものじやないはいの、コレ返しますお内儀アーよい人で有たのにむごたらしいめにあはれたと涙を咽につまらせてしやくり上ればお傳は興さめチ、何を爰な庄屋様はわつけもない事おつしやります、勘作殿はさつきに戻つて看經をして居られますアレアノ鉦の音が聞へぬかさいへど庄屋は顔打眺めア、いこしやこなたは氣が上つたの、チ、道理じやく息子は出世で往たと思へば

膽を取られに往たさのお上で、噲其上に又夫を殺されたと聞れたら氣も違はひで何せせふぞいのチ、此お方はいまくしいアノ奥に聞へる鉦が勘作殿お袋さまが自害なされ野送り御回向を申て居てござんすはいなコレハ又さつけもないお袋が死だと言はしやる程やつぱりお氣ちに違ひはないはコレこなたの男の勘作はのおれが見て居るそばで首はこるり死骸はくれるさあつた故杓の柄で首ついで戸板に乗て置ました。追付爰へ持て来る見て悔りせまいぞやアレ、死骸はも爰へと言ふ中持くる戸板の死骸なじみの村中しほく、涙片手に昇入て庄屋諸共に立歸る、女房猶も合點せず定て是は人違へこは言ふものゝ形格好、勘作殿に似た

死骸さこはくながら差寄て見れば連添我夫ヤアコリヤ疑ひもなき勘作殿ごふした譯さ半狂亂心も空に魂も飛で正体泣斗り足も心も地に付すさば言へ奥の鉦の音は我夫ならで心得ずさ走寄て一間の障子明る内には鉦の音も姿は見へず佛檀の燈火眠る透間より吹來る風の身にしてみてわつこ斗りに泣倒れ性根正体なかりしが漸々涙の顔を上扱は非業の及にかゝりはかなふ命取られても親さ妻子に引されて迷ふて來たのかこちの人魂魄此家に有ならば今一度無事なすがたを見せ詞がはして下されと返らぬ事をくごき立そこよ爰よと駈け廻り後に残りし鉦撞木見るも悲しやばかなやぞ打付投付身をもだへ扱も世の中の人の因果も是程に廻れば廻

るものかいの親子夫婦四人の内けふ
 一日に三人も皆淺間しい此おもひ因
 果人共業人共憎かたなき我骸一緒に
 死たい切れたい輪の咽しめたる報ひ
 なら俱に命を取よきて狂氣の如く駈
 け廻り老母の死骸を見ては泣き夫の
 むくろを押うごかし遙かの空を眺め
 やり戀しの我子なつかしや可愛の者
 やこ伏轉び聲を限りに泣盡す涙は軒
 の川水に浪立騒ぐ如くなり。や、有
 て涙を押へア、悔むまい歎くまい皆
 何事も定まりし浮世の中さあきらめ
 て我のみ残り何かせん、俱に冥途の
 道連は此門口の流れこそ夫も禁斷破
 りたる生澤川の流のすを鱗の餌さな

るならば少しは罪を遁れんさ小石を
 袂に拾ひ入れ心定めて表の方川邊に
 寄て觀念し身を投入とする其折から
 日期法師かけ來り飛込所を引さめ
 ヤレ女早まるなイヤ〜〜生て居
 られぬ我罪業見遁してたべ御出家さ
 又立向ふ其所へ末法有縁の大導師高
 祖日蓮大聖人しづ〜と立よりたま
 ひ最前より物陰にて始終の様子は残
 らず聞、女も歎きさる事なむらか、
 る因果も宿世の業、殺生の罪誹謗の
 罪科此國末正法をしらず汝我法華經
 に歸依し一人の伴を出家させ法華經
 を以て用はゞ夫は愚老母諸共即身成
 佛疑ひ有まじいかに〜こ宣へばア

愚の御僧さま出家さする子も有げ
 何しに惜み申すべき一人有し男の子
 は夫の爲に命を賣生残つたは私し一
 人構はず死して賜はれぬ歎きしづめ
 ばホチ、其歎きは尤々、汝も伴を
 買取つて連歸りしは六郎左衛門と言
 ふ北條家の武士道にて斗らず出合し
 故重時の病氣は誹謗の罪者婆扁鵲の
 良薬を用ゆる共いつかな平癒思ひも
 寄らず鎌倉に一字を建て萬部の御經
 を供養せば早速全快有べしと病氣消
 滅の曼陀羅を遣しそちが悴を助けた
 り逢て歎をさめよめよさ衣の裾より經
 市を取出し逢せ賜ふにぞ母は夢かこ
 歎も忘れヤレなつかしや有難やこ聖

人拜し我子を抱き悦び勇むぞ道理なり、聖人重て女に向ひ經市を名を付しは正法に縁有しるし、法華經は似第一の經文殊に人相を見れば世の常ならず日蓮になり替り法華經弘通の大導師とならん異相有り是より日縁を名を改めいよく我弟子たるべしと仰ば實にも理りや都はおるか西國まで弘め賜ひし名僧は此稚子の御事なりイテ此川にて夫も罪障老母も後世も弔はんご勸作が死骸をば戸板ながらに水に浮め自我偈百卷題目をも唱ふる妻や子の聲もさやくや妙法華經皆是眞實眞意の炎ほつご燃立つ内よりも鱗鵜の鳥うづ巻立て鐵の

鱗鵜ならし羽をふるひ眼をいからし勸作も死骸にたかつてしくむらをついき廻せば女房子はのふ情なや悲しや小川に駈おり駈上り狂ひ歎くを聖人制し是ぞ冥途の苦しみを此世ではらす現世の責題目愈る事なかれご傍りの小石拾ひ寄數多の石に七字の首題目朗誦共一字づゝ書付水へ投入、流に向つて題目を書せ賜へば多くの鵜の鳥一度に去て勸作が死骸は浪に入よご見へし書せ賜ひし七字の題目浪にありく現ばれしは成佛得脱疑ひなし是水流しの題目ご末世に傳ふ流灌頂、經木流しも是ごかや妻子はあつご有難涙水の面ご聖人を

伏拜みく目の前、夫も佛果の縁經市堅固に出家を遂先立賜ふ祖母様やご様我も浮めてたもいのご言ふも盡せぬ涙なり聖人莞爾ご打笑み賜ひ一子出家の功德にて九族天に生せん事何疑ひも嵐の雲心の雲も吹拂ふ妙法蓮華の經力功力有情非情の草木國土江河の鱗残りなく成佛解脱の其しるし今の世までも隠れなき甲州生澤の鵜飼石文字も朽す御法も朽す石はくちせぬ信心の人の寶ごなりにけり。

本門寺の段

日蓮聖人 竹本貴鳳大夫
日 期 法師 竹本町太夫
日 像 法師 竹本浪花太夫
右大辨光盛 竹本文太夫

(野澤八郎助)
豊澤廣太郎

人形

日蓮聖人 吉田榮三
弟 子 僧 大 ぜ い
日 期 法師 桐竹紋十郎
日 像 法師 吉田市松
右大辨光盛 吉田文作
町 人 大 ぜ い

(床本) 本門寺の段

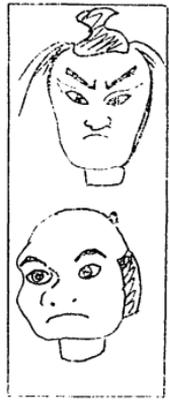
百年の狐大車を塚に引入れ千年の龜人詞をまれば是を事相のなしぎとす
正法に寄特なしとせば申せども高祖日蓮大聖人は本化六萬恒沙の統領上行菩薩の再誕故人法數ク度の寄瑞有り既に弘安五年壬午十月中の三日機縁の利益事終り御臨終の異境武藏の荏原千束の郷池上村本門寺に入り給ひ六老僧のめんく十八人の中老を始め其ほか信心の輩を召集め凡身の縁けな盡きて涅槃門に入べきなり我一代の聖教消息弟子且那に渡し置く日蓮お書と號け是を師として法を弘めば後五百歳の末までも我此世界に長らへて宿生を導く心を其驗として直作の影像、師且の契約に残すなり徒を思ひ慮らず毎年十月十三日三寶

の前にす(寂光淨土の鉢粧を鏝り佛恩法恩有べしと御遺物の品々葬禮だびの次第まで御遺言有りければ一座に有合ふお弟子且那曇る涙の聲々に御存生の教化たご佛敵法佛止む事なし今暫御在世有り宿生を助け給はれご悲歎の涙有難涙 聖人重ねての給へば佛は既に過去にも賦せず未來にも生れず所化もつて同躰なりな生滅ご説き給ふが要の中の肝要たり。法華經を唱へる今此三界の宿生は皆是れ我子なりと説給へば日蓮も爲には弟子且那なり致て疑ふべからずご示し給へば老若の僧俗一度に頭を下げあつご感するばかりなり斯て聖人御經の發願有壽量品の紐を説き久遠淨土の文に至り眠れる如く辰の刻讀經の御聲も絶へ御年六十一歳にて終に

御遷化ありければ、わつと泣出す僧俗貴賤五十二額の悲しみも遠き昔を忍びれや袖をしぼらぬ者はなし。誰か遁れん愛別離苦涙も俱に御弟子達棺に納め奉るかゝる所へ日朗日像息をばかりに駆け來り南無三寶是は早御臨終にはづれしかこ首題も俱に涙の雨理りそこそ聞へけれ暫くあつてお旁我々は勅命にて都へ登り師弟一期の御名残りに逢ひ奉らぬ残念さ各は打揃ひ御臨終の床に詰報恩開悟に預り給はんうらやましいと咽ひ涙にくれ給ふ、かゝる折柄表より勅使の御入りと呼ばるにぞ一間を隔て相待つ所へ右大辨光盛卿ゆうくこ入給へば日朗日像謹んで日蓮只今臨終有不淨なる此坊舎勅使の御着座恐れありと申し上ぐれば光盛卿謹んで聞

けられよかゝる寄特大導師遷化あらば贈號謹んで聞れよと宣命を指あげ此度日朗日像兩僧雨の祈り寄瑞あつて萬民を助ける事は全く日蓮宗意の法義を保つ徳なり是によつて日蓮に大菩薩の號を下せよと勅詔有難く思はれよと仰に各有難く涙の中にも日朗日像は今の勅詔我祖師の存生にて承わらばいかばかりの悦びさ又も秋をひたす所に棺の内より高々に日朗く日像と召るにぞはつと驚き走り寄り棺の蓋押し開れば微妙の御聲あざやかに我いやしくも凡家に生じ菩薩の號を享ける事全く日蓮の力に非ず正法の威徳ぞや此後彌々宗意尊み日朗は關東に残り日像は西國へ趣き猶も法義を弘通せよ我今爰に終ることも不生不滅と思ふべしと仰せば直に末期の一句終に事きれ給ひける

わつと斗りに泣くくも御棺の蓋をさち奥殿へこそ移しけり勅使も御座を立給へばはつこまばかりに禮拜の光盛卿はとづく御門へこそは出で給ふ開運開くる法の花本殿の正面には御眞筆の大曼陀羅うやくしく數千の燈明照輝き瓔珞華曼幡天蓋百味の備十種供養名香四方に薰せしは極樂淨土も斯くやら入題目の聲澄み渡り幾千さなく櫻花池上寺の花の山春の景色をあらはせしは實にも末世に御影式御法の榮尊けりそもく我宗主日蓮は五濁の闇を化度せんさ大難四ケ度小難は數限りなき御艱難宿生再度の御誓願語にも愚末の末後五百歳は終る共法義は盡じ南無妙法蓮華經くく皆是れ眞實くく合掌首題僧俗入佛法繁昌國繁昌五穀豐饒の秋津島おさまる御代こそ目出度けれ



堀川猿廻しの段

中 近頃河原達引

堀川の段

切 竹本土佐太夫

野澤吉兵衛

ツレ 竹澤團 六

人形

與次郎の母 吉田小兵吉
 弟子おつる 吉田文之助
 兄與次郎 吉田榮三
 娘おしゆん 吉田文五郎
 井筒屋傳兵衛 吉田扇太郎

『それや聞えませぬ傳兵衛さん』で有名なこの淨瑠璃はおしゆん傳兵衛の心中を主材としたもので、元文三年十一月十六日の朝京都聖護院の森に於て發見された吳服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の抱へお俊との情死事件と、同じ頃京の公卿侍と所司代の下部とが四條顔見世芝居の歸途喧嘩及傷に及びし一件と、孝子として表彰された猿廻しの丹後屋佐七の話とを取合せ佐七を與次兵衛に作りてお俊の兄として構想したものです。天明五年五月江戸肥前座に書下され、爲川宗輔、筒川半二、奈河七

五三助の合作であります、これより先き豊竹八重太夫が天明二年道頓堀中の芝居で語つてゐます。この堀川は全曲の中の巻になつてゐます。

(床本) 堀川の段

おなじ都も世につれて、田舎が增の薄煙、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手もつれ氣もつれを、保養がてらの薬風呂、あふぐも我を濫團扇、目さへ不自由な暮しなり詞おつる様嘸ぞ待遠にあらうなア、そしてなにやらのさらへであつた、オーそれ鳥邊山、アリヤじたい心中事、會にでも弾くのなら、お前は女の方、お繁さんは男の方、かけ合にうたふがよいぞへ、ドレ〜お繁さんのか

わりには、私と掛合ひにうたひませうと、老
 手彈手もしほらしき 二上りウタをなほ
 女肌には白
 無垢や、上に紫藤の紋、中着緋紗綾に黒
 縹子の帯、年は十七初花の、雨にしほる、
 立姿、男も肌は白小袖にて、黒き縹子に色
 淺黄裏、二十一期の色盛りをば、戀さいふ
 字に身を捨小舟、どこへ取付く島までもな
 し、鳥邊の山ばそなたぞと、死に行く身の
 後髪、弾く三味線は祇園町、茶屋のやま衆
 が色酒に、亂れて遊ぶ騒ぎ合ひ合の面白
 さを見る時は詞ア、イエ、それではさん
 と聲にしほれぬはいいな歌あの面白さを
 見る時はさ、かう調ひなされ。アイ、あの
 面白さを見る時は、詞オットヨシ、染殿
 そなたと某が、去年の初秋七夕の、座敷
 踊をかこつけて、忍び逢ふたる事思ひ出す
 詞オ、今日はマアそこ迄、精が出る程
 あつて、きつう手も廻り出したモウ、ど

こで弾きなさつても恥かしい事はないぞへ
 と、聞いて笑顔の片男波、又明日さいふ沙
 に、お鶴は立つて歸りける。母を大事と油
 断なき、見過ぎも軽き小風呂敷、肩に乗せ
 たる猿廻し、戻りはいつも日暮前與次郎は
 いきせき門口から、詞母者人、今戻つた
 ぞや、オ、兄戻りやつたか、嘸ぞひもじか
 る、茶も濁いてある、膳もそこにして置い
 たぞやオ、徳よ、今戻つたかよ、今朝から
 子猿めが親を尋てやかましい、コレ兄や、
 ちやつと傍へやつてやりやいのアイ、
 左様でござんしよさも、ソレちやつと乳を
 呑してやりおれ。イヤノウ與次郎、そなた
 が孝行にしたたもるに付け、私か此長々の
 病も、いつ本服する事であらうと思へば、
 勞の上には猶勞れる、僅な弟子衆の餘情や、
 我身の働きて、此養生がマ、なるものか
 思へば薬も毒さなり、母ではなうて子供の

大皇帝キネ映畫封切場

眞意の味の大衆第一主義

あなたの

辨天座

温かさの涙の出る日の本映畫もつて

爲には苛責の鬼と思はるゝ、鬼は冥途にあるものを、つれなの老の命やと、身を悔みたるむせび泣き、哀にも又いちらし、詞ア、コレ母者人、ソリヤマア何を云はんすぞいの、其様にもそやかな身代ぢやと思はしやるか、此間弟子入した米やの息子殿から長々お袋の煩ひで、嗚かし勝手も悪からうと、云ふて陽が花かご申すやうな、上白米の仕送り、店々の旦那衆から、何なご用があるなら云ふておこせ、若し出養生さしますなら、幸な隠居所もある程にさ、云ふて来るお方もあり、煮糲饅頭生魚、近所隣へ早々すそわけもしられば、鯛赤貝の類は塗町の鮓屋へ卸賣、モコレ案じる事は微塵もないぞや、それにまだくまだ氣の毒なは、此家主が此家を居なりに、買ってくれぬかご頼まれる、ヤレイやゝのくア、あた世話な家持よりは金持が、遙ましであらう

かご、母に案じをかけさせぬ、贅八百さへ一貫に、たらぬ節季の事譯を、云ふ下稽古やこれなるべし。嘘さは知れど老の身は、子にしたがふがならひぞと、機嫌よげに打ちうなづき、詞オ、それ聞いて落付きましたか、落付ぬは娘が事、此間も親方も、おしゆんを預けに來ていはしやるには、コレ傳兵衛殿と云ふ客の事で、ちこ内に置かれぬ事がある、譬へ傳兵衛が尋ねてござる共、おしゆんが歸つて居る事は、包み隠さればならぬぞやと、くれぐれも云しやつたぞや、サアわしも其入譯を聞た故、おしゆんが心根を思はずしらす涙が、ドレ灯を燈そご柵のすみこそく取出す行燈の、灯かげも洩るゝ暖簾ごし詞、おしゆん、コレおしゆん、アイミ返事もしほくご、思ひなやみし顔形、まアく愛へさ小聲になり、詞、門の戸はかけてある、見る人も聞く人もない、方々

む生を題話のいよこ

一ユヴレミ書映



ぼんさうご

座 竹 松

で噂を聞くに、此間の川原の喧嘩、殺し人はサ殺し人はわが身の客の傳兵衛殿なただ大恩請けた久八云ふ者む、代りに捕られて往つたげなが、其場に落ちてあつた小柄があの傳兵衛殿が御屋敷から、拜領した小柄ぢや故天命遁れず御詮議最中、なれども其夜から傳兵衛の行衛も知れず、其あひ方の女郎はおしゆん云ふ事を、お上にもよう御存じで、親方の方へもいろ／＼と、御詮議あれど、これも行衛が知れぬと云ひ切つて、今もめてある最中ぢやと、取々の噂評判、おりやもう聞く度毎にびく／＼するさ、聞くほどせまるおしゆんが胸詞其夜の起りも皆私故、どこにどうしてござるやら心元なき逢ひたさも、云ふに云はれぬ此場の品、いかゞ胸もふさむりし、母は一途に娘の可愛さ、詞コレ／＼おしゆん案じる事はないわいの、併し突詰た男氣で、ひよ

つここの家へ来て、又物ざんまいでも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに、毛寝られぬまゝの物案じ、世間にたんざある格な、心中やなごしてくれたら、此母は目かいは見えす、兄はアレあの様な臆病者もしもの事があつたらば、跡で母はどうせうぞ、袖乞物貰ひに歩いて、そりやもう一つもいさやせぬけれどもそなたの體に凶事でもあつたら、おりやもう直ぐに死んでしまふぞや、若い氣に見捨てはさ、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨てはさ、詰らぬ義理を立抜いて、年寄の此母につらい目見せてたもんなやと、可愛さ餘る親心、ア、南無阿彌陀佛も涙聲。兄も俱々ヤコレおしゆん詞今母の云はるゝ通り、何の義理もへちまもいらぬ、ごいてしまへばあかの他人ぢや又おれも氣にかゝつて、好きなものさへ咽へ通らぬわいのう、母者人の氣休め、おれが

日本の代表映畫
松竹キネマ
第一封切場

映畫の

朝日座

さんらんたる春の
饗宴その先をゆく
映畫の獨域その後
に來る法悦??

腹助けちやと思ふて、どいてたも、ヤコレ頼むくぞ正直一逼、母の心さ兄の詞、勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸の内所詮死なればならぬ身の、此場を抜けて其上で、心一つに思案を極め、母橋、兄様お二人の、お詞よう合點いたしました殊に又傳兵衛さん、ツイ一通りで逢つた客、深い牛太夫サハリ、譯でもないわいなア、併し勤のならひにて、人の落目を見捨てるを、里の恥辱とするわいな、とても末の詰らぬ事わしや得心してをりまする詞ちよつと逢つて其上で憎う悪うもない様に、得心をさせまして、品よう譯の立つ様に、詞イヤく其様に譯立てるご云やつても、あつちに得心せぬ時は、それく行がけの駄賃馬で踏殺し、ア、イヤく無理殺しにせうもしれぬわいの、コリヤめつたにはかみ合されぬわいの、お、兄の云やる通りぢや、そなたに

怪我でもあつては、傳兵衛殿さやらも難儀思ひ切るのがあつちの爲、わが身に心引されては、つひ捕へられるはしれた事、退状をやつたらそなたの事も思切つて、お、切るさもく、遠い國でも影を隠したら、身を遁れまいものでもないわいの。コレくむづかしがる共ツイ一筆、兄硯箱取てやりやサ、早うくご母と兄、詞にいなも泣顔を隠す硯の海山と、重ろ悲ひのべ紙に、筆の立どの跡や先、涙に墨のにじみむちなる胸の内、書残すさば露知らぬ、與次郎は傍から、詞コレノコレ其様に長たらしう書ずとも、ツイごきますと書いてもすみさうな事ぢや。イヤノサ書いたものは後々迄も残る物、男の去状と同じ事、まつくりと譯の分る様に書いてやるおよいぞや。アイ此状にまつくりと、御合點の行様に、兄さん、此文お前からお渡しなされて。オツトよしよ

お侍兼れの

新國劇

陽春四月の

座角

潑刺の演技
鮮烈の舞臺

し此状さへあれば千人力ぢや、マア〜母
 者人も落付しやれ、さやかく云ふ内九ツ前
 お前も奥でサ、もうねやんせ、オ、それ
 〳〵今夜こそゆつくりさ、心よう癒るであ
 らう兄もそなたもそこに寝やま、奥底もな
 き隔てなば、押明てこそ入にける 詞サアお
 しゆん、こちらも爰で往生いたそ、アイさ
 おしゆんが俱々に、暫し此世をかり蒲團、
 薄き親子の契りやま、枕に傳ふ露涙、夢の
 浮世と諦めて、更け行く鐘も哀れ添ふ。頃
 しも師走十五夜の、月は芽れど胸の闇、過
 ぎし別の言ひかはし、死なば一緒ぞ傳兵衛
 が、忍ぶ姿のしよんぼりさ、今も肝は目覺
 えの、髓に爰ま門の月へ、さばる相圖の咳
 拂ひ、聞くにおしゆんが飛び立つ思ひ、上
 げる枕も打つづ、與次郎は傍に高舳心
 も俱に行燈の、灯ふき消さし足に心急ぐ程
 明兼ねる、戸口の繫金表にも 詞 おしゆんぢ

やないか、傳兵衛さん、よう逢ひに來て下
 さんしたさ、云ふ聲寢耳に與次郎が、恠り
 起るさ明くる門の口、妹が姿もくら紛れ、
 さらへる袖のふりあはせ、おしゆんさ心得
 傳兵衛を、無理に引込取違へ戸口を内から
 びつしやり引立て 詞 そりやこそつれに來お
 つたぞ、おしゆん必ず外へ出まいぞや、戸
 口はおれが押へて居る、ヤア門に居るは傳
 兵衛ぢや、おのれを入れてよいものかさ、
 いふもがた〜胸ぶるい、詞 コレナア兄様
 わしや表に居るわいな何ぢや表に居るわい
 なア、ヤア其聲色置てくれ、そんな事喰ふ
 おれぢやないわい、母者人、母者人、傳兵
 衛がおしゆんを殺しに來た故、今表へたて
 出した、おれ一人では手が廻らぬ、こなた
 も加勢して下され、加勢〜〜と、うろ
 〳〵傳兵衛の加勢、ム、また外に同類

歡喜 興奮 魅了
 のうさつするもの

松竹家庭劇

明いるユモースラな舞臺

浪花座

でもあるのかと、探り寄つたる傳兵衛が傍
 詞コレ〜おしゆん、顔ふ事はない、兄や
 母が付いて居る、マア氣を鎮みやミ撫でさ
 する、脊の手さはり合點行かす詞コレ〜
 與次郎、どうやらこりや娘ではない様なわ
 いのヤアくらかり紛れに材木も紛れ込みや
 せぬかや、こなたつかまへて居て下されや
 ぞ、探る手先に火打箱、がち〜ふるふ附
 木の光り、詞シヤアコレヤ妹ぢやない傳兵
 衛ぢや、お袋兄御、エ、面目もない此姿
 猶も小隅に屈み居る。コリヤヤイコリヤヤ
 様にしほ〜として見せて、おいらを欺し
 て、おしゆんを突うとするのか、其手はく
 はぬさ懐より、一通取出し、こぼ〜な
 ばら傍に寄り、詞コリヤ〜傳兵衛、おし
 ゆんさ我さ手も切れぬさ、科人のわれじや
 によつて、妹迄難儀する、それでさつき
 に妹に得心さして、ごき状を書かしてあ

れば、コレこれを見い、これぢやによつて
 モウ〜〜おしゆんむ方に殘心氣は離れ
 てあるわいム、スリヤおしゆんが其退状を
 サアごき状ぢや、エ、其心さは知らず云ひ
 かはした、詞を誠と思ふて、迷ふて來たが
 無念なわい、口惜いさ齒を喰しげる男泣、
 恨を聞くも隔たる戸口、心はさうじやない
 じやくり詞オ、嗚腹が立う道理ぢや〜、
 マア〜さつくりと氣を鎮めて、退状を見
 て下さんせいなア、オ、それでよい、長う
 物いやんな屑が出るぞ屑がコリヤヤイ〜
 傳兵衛おれが讀んで聞かしたうてもな、皆
 目おれはナニアソソレオ、祐筆ぢやわい、
 サアサア早うと封じめ切り、突付られて目
 に溜る、涙を拂ひ、詞ナニ書置の事ヤア何
 ぢや、書置ぢや、コレ〜兄正直な、悔り
 する事はないわいの、そなたは無筆わしや
 盲、書置ぢやと讀違へ、うろたへさして門

！座王の居芝！だ居芝！だ華

生活戦線の安息

家廻我曾

劇 郎 五

中 座
ごうさんぼり

口へ出て娘を存分にせうこのたくらみ、ハアハアそんな嘘は喰ませぬ、サアサアほんまに讀ましやれ、コレコレ與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや。オ、呑込んで居る、爰にはおれが、へへばり付いて居るわい、サア、早く讀みやい、ものこそよう書かれ、聞く事は祐、ヤナニ無筆じやないわい、サア讀だ、エ誠(まこと)にこれ迄の御養育、海山にも譬(たと)へがたき親の御恩、殊更(ことさら)不自由なる御身の上、何卒(なにとぞ)首尾(しゆび)よう勤(こ)を遁(のが)れ、世を樂に過(すご)させまし候(まを)は、せめて少しの御恩報(ごおんほう)じ孝行(かこう)の片(かた)はしにもなり候(まを)はんさ、そのみ朝夕(あさゆふ)祈(いの)り、二世(にせ)迄(まで)云(い)ひ交(か)はり、傳兵衛(でんべゑ)様、思(おも)はぬ此度(このたび)の御身(おんみ)の難(がた)も、根(ね)を尋(たづ)ねれば皆(みな)われ故(ゆゑ)に候(まを)はへ、今(いま)さら見捨(みす)て候(まを)はては、女の道立(みちだて)ち申(まを)さす候(まを)は、不孝(ふかう)さは思(おも)ひなむら、俱(とも)に覺悟(かくご)を極(こ)り。オ、母者(ははぢや)人、

どうやら風(かぜ)がかはつて來(き)た様(よう)な、サイノウわしも胸(むね)がどきどき、サア其跡(そのあと)をちやつと讀(よ)んで下(くだ)され下(くだ)され。エ、俱(とも)に覺悟(かくご)を極(こ)め、先程(さきほど)傳兵衛(でんべゑ)様(よう)へ退狀(たいじやう)を申(まを)して認(した)めしは此事(このこと)申(まを)上(あ)げ度(た)きま、退狀(たいじやう)と偽(いつはり)り書(か)き殘(のこ)し候(まを)は。何事(なにごと)も、前世(ぜんせい)よりの定(さだ)り事(こと)、御諦(ごたじ)め下(くだ)され候(まを)は、申(まを)上(あ)げたき數々(かずかず)、筆(ふで)にもつくしむたく候(まを)は、共(とも)、心(こゝろ)せくま、申(まを)入(い)れり。オ、さてばさうした心(こゝろ)か驚(おど)く傳兵衛(でんべゑ)親(おや)子(こ)はうる、詞(ことば)、氣(き)づかひな、コレ兄(あに)や娘(むすめ)を家(いへ)へ、早(はや)う、母(はは)があせれば與次郎(よじら)も、戸口(とぐち)明(あ)ければ走(は)りよる、妹(いも)を無理(むり)に四人(よにたり)も、顔(かほ)合(あ)はして溜息(ためいき)、涙(なみだ)はさら(さら)にわかちなく、何(なん)と詞(ことば)も傳兵衛(でんべゑ)、泣(な)く目(め)を拭(ぬぐ)ひ詞(ことば)一旦(いつたん)いひかはした詞(ことば)を立(た)て、俱(とも)に死(し)なうと覺悟(かくご)して、義理(ぎり)を立(た)てぬくそなたの貞節(せいせつ)忘れ(わす)れせぬ嬉(うれ)しいぞや思(おも)ひ廻(まわ)せば廻(まわ)す程(ほど)、我(われ)こそ死(し)なで叶(かな)はぬ身(み)、そなたは料(りやう)のない

即席御料理
電話新明九番

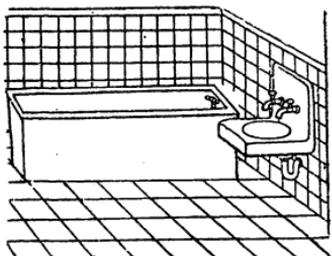
濱濱

町

レ拜みます頼みます、手を合はしたる母親の子故に迷ふ闇、二人は何も詞さへ涙に涙結ばる、血筋のわかれ與次郎も、涙の雨の古布子、袖喰ひしげりしやくり泣き、ア、傳兵衛様の泣とやるも道理ぢや、道理々々云ふて居ては、れつからはつからいつ迄も分らぬ道理ぢや詞がコレ傳兵衛様、母者人も今の詞、御合點が参りましたか、エコリヤ我も得心してくれましたか、合點がいたか、サ、合點したらばどうぞ此塲を、立退く分別、併し其形では人目に立つ、京の町を放れる迄、此編笠で顔をかかし、幸ひの猿廻し、まめで二人が末長う、目出たう女夫になりさける、門出の祝ひに此與次郎が、お初徳兵衛が祝言の壽、此方衆も生別れの盃、イヤ、祝言の盃と祝ひ諷ふも聲びくに、有田ウタ、お猿はめでたやな

合ヒヤウシ 舞入姿ものつしりさ、詞コレ去りさば、ノウあるかいな、さんな又あるかいな、詞オ、徳兵衛様ござんせ、餘りこな様が來やうが遅いによつて、お初様は顔真赤にして、腹立て居やんすわいのうコレお初様、舞様が盃をしいさいのう、機嫌直して盃を、戴かんせ、コレ、詞たいくノウ盃を、さんな又あるかいな、詞ヤコレ、コレ舞様、足で盃をさすばあんまりつれない、それでは嫁御様が戴かんせぬわいのう、ひぞらずさほんまにさしてやらんせ、さうぢや、コレ、お初がいたいた物ぢや、コレいたやくのう盃を、さんな又あるかいなヒヤウシコレ嫁御の晝寝もころりさせい、ナコレエあるかいなさんな又あるかいな、詞コレ、舞様餘りつれなうさんすによつて、おしゆんヤアノ何嫁御様が起さんせぬわいの、そこらでち

化粧久イル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所



西區立寶堀北通一丁目
新一橋

岡部商會

阪急 夙川

岡部商會支店

電話番町(六六九
二二七六
電話西宮一九七六

よつと起したりく、エ、コリヤ、コリヤ
 ヤイ、コリヤ、去りまはくノウあるかい
 なさんな又あるかいな、ヒヤウシ 起たら互
 ひに抱付きやれ、オ、それで機嫌が直つた
 ぞ、エ、い、あるかいなさんな又あるかい
 な、くるりと返つて立たりな、立てくれ、
 コレくコレ立しやませ、序でに日和を見
 てたもれ、ア、よい女房ぢやにくノウあ
 るかいな、なさんな又あるかいな ヒヤウシ
 日和を見たらば落ちてたもく、オ、さう
 ぢやくく、お猿は目出たや目出たやな
 サ、い、い、きりく、此家を猿廻し、まさ
 る目出たう何時迄も、命まつたう仕てたも
 こ、目ば見えれども見送る母、詞も此世で
 聞き納め、心の内の暇乞ひ明日の噂の形ふ
 りも、やつす妻の女夫づれ、名を繪草紙に
 聖護院、森をあてぎに 三重
 〽 たどり行く

現代的



電話戒三七五六番



五條橋の段

牛若丸 竹本南部大夫

ツ 竹本源路大夫

レ (豊竹千駒太夫
竹本長子太夫

野澤吉 彌

ツ (野澤八歌
野澤寛

鶴澤寛 市

レ (野澤喜代之助
野澤吉

切 鬼一法眼三略の巻

五條橋の段

この淨瑠璃は文耕堂長谷川千四の合作になるもので五條橋は全曲の第五段目にあたり初演は享保十六年九月十三日の竹本座であります鞍馬山に飯法を修業する牛若丸が五條橋に辨慶と出遇ひ組伏せてこれを家來にする條りです、

(床本) 五條橋の段

扱も源の牛若丸父の修羅の魂魄を慰めんさ川風添ゆる夜あらしの夕ア程なき秋の空面白や心うき立御出立肌には練の御あはせ紅ひすその御きせなみ糸かす織の大口に薄緑さいふ御ばかせ五條の橋をさしてくる傘のしぶきも高足駄橋板さいろさ踏なら

し行こふ人を待たまふ御有さまぞ不敵なる西塔の武藏坊辨慶は其頃都にありけるが五條の橋には人をなやます曲者有りき聞しかばそれを從へ召遣はんさ心も空もはるる夜の月も音羽の山の端に出立つ鎧は黒かば緘し好む所の道具にはくま手ない鎌鐵の棒さい槌 銀 鐵 さす股さすまゝに權現より賜はつたる大薙刀真中取て打かづきゆらりくさ出たる有様いかなる天魔鬼神なりさもおもてをむくべきやうあらじと我身ながらも物たのもしく手に立者のア、ほしやさひさり言して打わたり向ふなきつこ見てあれば橋のほさりの青柳の糸より細き腰付にてすつくさ立たる女すがた傘傾けておもはゆぶり辨慶元來法師の身女に何さいひかけん詞もな

辨慶

豊竹つばめ大夫

ツ

豊竹辰太夫

レ

(竹本陸路太夫
竹本播路太夫)

豊澤廣助

鶴澤友之助

豊澤猿二郎

鶴澤友二

人形

牛 若丸 桐竹紋十郎
辨 慶 桐竹政 龜

まめく氣色にはち橋のかたへを過ゆ
けば若君彼をなぶつて見んさ右へよ
くれば右に立ち左りへ行けば左りに
行ちむひさまに薙刀の柄をばつしこ
蹴上ればスハくせ者よ物見せんさ薙
刀柄ながく追取のべ切てかゝれば若
君は薄衣取のけ打寄するつるぎをあ
さむく傘は六十間の橋の上ひらり
くくくるくく車にもまるく牛若
丸辨慶いらつて早足をふみ遁さじも
のこ切込を丁ど請たる勢ひは雨をお
こせる蛇の目の傘風ふきはらへば飛
かほしひらりさ抜たる小太刀のかげ
星のひかりさ水車所は名におふ加
茂川の流に立波ごうくくくご
寄すれば白鷺のあしべにあさる片足
立すがたはつくばれ羽子板の拍子は
きぬたの音むそふ返しうつゝの太刀

二つの鑢音からくくらんかん傳
ふさふさの蜘蛛のふるまひ木づた
ふましら水の月かや手にたまらぬす
がたをしたふ薙刀のふたりやおふこ
しつかさ取りぬいよさ引けばぬいさ
引く橋の擬寶珠玉の汗鑢を削りて戦
ひける辨慶秘術を盡せ共終に薙刀打
落され組んさすれば切ばらふ縫らん
さするに便りなく證方盡て橋桁を二
三間さびしさり果れ果て立たりける
此辨慶に大汗かゝす汝は何者ホ、我
こそは源の牛若丸シタリ道理で大
体の人でないと思ふた今より後は御
家來コレ可愛がつて下さんせと頭を
橋にぞ付けにける主従三世の縁の綱
約束長き五條のばし橋辨慶さ末の世
に語傳へて繪にも書祇園祭の山鉦に
も祝飾るぞめでたけれ。

四ツ橋
りよ

三月の文樂座
消息日誌

△三月一日

三月興行の初日開場。
猿系改め七代目豊澤廣助襲名披露あり、
披露狂言として、道行初音の旅路が選定
されました。

△三月三日

七世豊澤廣助の松葉家連の總見今日より
初まる。

△三月十五日

順宮内親王殿下御生誕奉祝記念奉送とし
て「義經千本櫻」道行初音の旅路と河連
法眼館の段をBKより舞臺中總で全國へ
放送されました。

△三月十日

文樂會開催されました。

△三月廿四日

阿部第四師團長閣下は參謀長其他幕僚方
と共に御來觀されました。

△三月廿五日

三月興行も満員の裡に愈々打上げました

△三月廿六日

姫路地方の特別觀劇團のために開演三月
興行の上演藝題に特に青年子女のために
マチネーで好評の「寺子屋」をも併せて
上場しました。

△三月廿七日

堀江方面の方々のお申込によつて、マチ
ネーを特に開きまして、寺子屋と、勸進
帳を上場いたしました。

△三月廿八日

常磐津大會が開催されました。

△三月廿九日

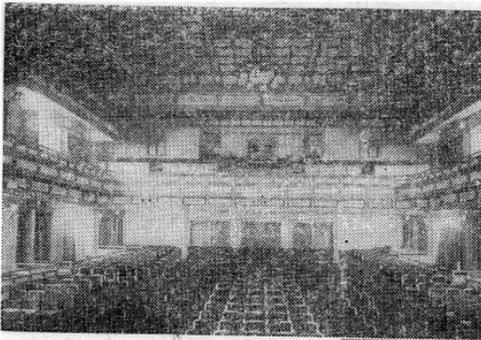
上田流尺八演奏大會も開催されました。

茶

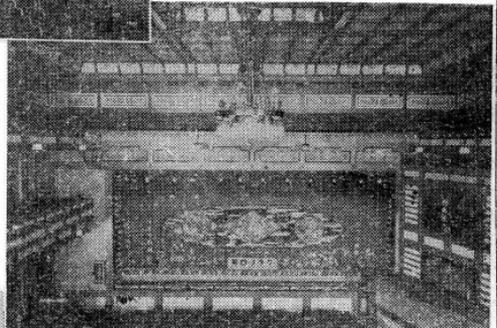


大改池橋
茶座
番三三六二町新紙電

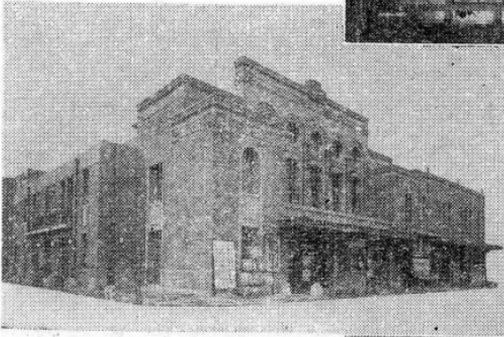
グ 文 四
 ラ 樂 ツ
 フ 座 橋



景全席覽觀内場



お囃を臺舞りよ席覽觀



景全觀外座樂文



口入御席賓貴と所憩休面

文樂座 使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座が御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座が御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座が必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
- 既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセヌ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)	夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 夜至午後十時)	
文樂座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓

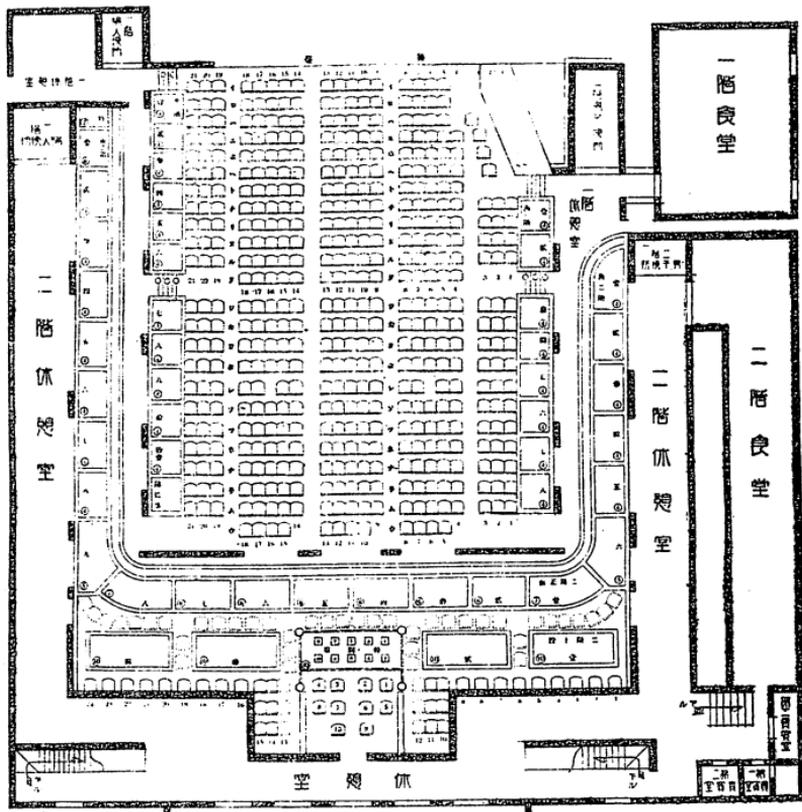
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスホツト	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スホツト	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスホツト	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フツトライト	20W 100W 7球	1本 1圓
ゼラチンペーパー		1枚1回 1圓
大衝立	晝 夜	1對 5圓
演壇設備	同	1回 2圓
其他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラガエータ使用料		無料

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅
 子席のお切符は五日前から發
 賣致します、また五日以後の
 お切符も右席に限り御豫約申
 上げますから上圖の座席表
 に依つてお早く御望みの御場
 席をお申し込みになればお心
 のまに好きなきな處が御自由
 にされます御用命の節お呼出
 しの電話は

南四七一一番で御座ぬます
 切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します。

尚多人數様お団体様のお申込
 も御相談いたします。

◆文樂座御ひるき名簿募集◆

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部
わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」 特價 金貳圓

楽しいグラフと興味
ある好評物月刊雜誌

道 頓 堀 一部 金三十錢

美しい原色版紙印刷
楽しい文樂座の包裝

文樂の繪葉書 二枚 金十五錢

文樂人形版畫もあります

その色合。その雅趣。

郷土藝術の香ひ溢るゝ

文樂木版手摺繪葉書

新版發行されました。

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある

齋藤清二郎氏の作品です

毎月發行 三枚一組美麗なる包裝

一部 金 五十錢

お食事

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食ミバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處で御願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帶品

正面一階に御預り所が御座います。からお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。すからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致します。が不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帶願ひます。

お場席券

各自に御持ち下さい。切符に一枚づつ番號が附いて居ります。からお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。御祝福心附は堅くお辭退申上げます。不行届點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ

案内人へお茶を差し上げます。から御休憩所でお飲み下さい。お飲みの準備が御座います。から御自由にお使用下さい。

幕間中は

寫眞撮影は絶対にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

場内にて

場内には事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種備物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

出演者

正面西側本家茶屋階段下に御座います。文樂座指定の均タクが新車を揃えて玄關にお待してゐます。

當座御使用

お電話は自動車の御用にも電話にも

望遠鏡にも

眺望よき休憩所が御座ります

四ツ橋

文

樂

座

前賣切符専用電話南四七二番

電話南 三七四〇八番
三七八八番

昭和六年三月三十一日印刷
昭和六年四月一日發行

大坂・四ツ橋・文樂座
編者 大塚 真三
発行人 大塚 真三

大坂市西區土佐通一丁目
印刷者 永井太三郎

大坂市西區土佐通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

は會集御の月四春

ゝいのじ感いる明なかや和

で場劇會宴の阪大

會宴御の座樂文

(B) 金四

圓 (御一人様)

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は快美な『ランチ』
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

(A) 金五

圓 (御一人様)

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は皆様本位の御定食
(和食洋食兩様の設備が御座ります)
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

□お申込は二十人様以上をお請け致します。

□記念撮影のお寫眞は終演と同時に所持歸り出来るやういたして
おります。

□お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願いたします

□お申込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。

□お電話の御用は前賣専用兩四七一一・三七八八・七四〇八番へ

はひ粧の春

粉白ブラク

軽快な春着
に適はしい
クラブ白粉
の朗らかさ



CLUB TOIL



この麗はしい
お肌の輝きは

ムーリク美ブラク